雜誌　女學

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 236. OCTOBER, 25TH. 1890.

第二百三十六號目次

EDITORIAL:—The Perfect man—Christ. Recommending the Female Education.
MISCELLANEOUS:—The Brief History of Japanese Pictures, (Suyematsu Kentō). Cooking School, (Misao). "Tear drops." The Letter of Kumano's Mother. Success and Failure of Work—do Women Generally Fail? (Usui Sanjin). The Misfortunes of Literati, (Unpōshi). An Interview with Mrs. Niijima, (Fumiko). On Reading the "Discourse on Etiquette," (Tenchishi). Humourous.
NOVEL:—"The Little Lord Fountlerory," (Wakamatsu Shidzu).
CRITICAL NOTES:—"Rai Sanyo." The Two Lately Published News-papers.
PERSONAL CRITICISM:—Mr. Suyematsu Kento's Lecture, (Unpōshi). The Want of Elegancy of Japanese Literature. Mr. Ochiai Naobumi's Lecture. "Megumi, Magazine"—No. 1.
CONTRIBUTED ARTICLES:—
NOTES ON THE NEWEST ISSUES. The Establishment of another Girls' School at Aizu.
CONCERNING WOMEN:
SINCE OUR LAST ISSUE.
OPEN LETTERS.

●社說「完人物基督(中)○女學の勸め
●雜錄　日本繪の歷史概畧(末松謙澄)○割烹學校(みさを)○涙滴口　熊野の母の手簡(まさな)○事業の成否女子多く失敗する耶(上)(碓氷山人)○文學者の不幸(雲峯生)○新島襄先生の未亡人の談話(ふみ子)○禮論を見て(天知子)○アヽ感情　○きよめぬ庭
●小說　小公子(若松しづ子)
●批評　賴山陽を論ず○二個の新らしき新聞
●一家評　末松謙澄氏の演說(雲峯子)○國文の不体裁○落合直文氏の演說○めぐみ第一號○筆海○峽中時事
●寄書　太夫人實成院行狀
●交詢　數件
●時事　○元老院留別○男女俳優の所作事○主義の人主義の筆○芊さ自由○會津女學校○新潟女學校○三政黨に勸告す○剛柔の題例○詩經中の淫詩○文學上の交際家○京都に於る女學校
●片々　十件
●通信　數件
●廢娼記事
●週報
●海外通信

N. W. C. T. U.

SUPERINTENDENTS OF DEPARTMENTS.

(II)

IV. EVANGELISTIC.

Evangelistic—Miss Elizabeth W. Greenwood, 151 Remsen St., Brooklyn, N. Y.; National Evangelists—Mrs. S. M. I. Henry, Evanston, Ill.; Mrs. Annie M. Palmer, Boone, Iowa; Mrs. Mary Sparkes Wheeler, Phœnixville, Pa.; Work among Miners, Mrs. D. W. English, Rushville, Ill.; Bible Study, Rev. A. A. Wright, Cambridge, Mass.

Unfermented Sacramental Wine—Mrs. R. A. Esmond, Syracuse, N. Y.

Flower Mission—Miss Jennie Casseday, 216 E. Chestnut St., Louisville, Ky.; Department Secretary, Miss Gertrude Ferguson, 2633 Bank St., Louisville, Ky.

Work in Prisons, Jails, Police Stations, Almshouses and Asylums—Mrs. J. K. Barney, Providence, R. I.; Department Secretary, Mrs. H. D. Walker, Providence, R. I.

Work among Railroad Employes—Miss Jennie Smith, Mountain Lake Park, Md.

Work among Soldiers and Sailors—Mrs. S. A. McClees, 24 Hawthorne Ave., East Orange, N. J.; Secretary, Miss Anna L. Davidson; Associate, Veterans' Branch, Mrs. E. S. Moffat, Tacoma, Wash.; Petition Work, Mrs. Lavinia H. Chace, 1310 I St. N. W. Washington, D. C. Evangelist, Mrs. Mary Grant Cramer, 40 Prospect St., Orange, N. J.

Work among Lumbermen—Mrs. Mary C. Upham, Marshfield, Wis, Associate, Mrs. Emma Obenauer, East Saginaw, Mich.

Sabbath Observance—Mrs. J. C. Bateham, Painesville, O.

Promotion of Social Purity—Miss Frances E. Willard; Associates, Mothers' Meetings, Mrs. Dr. J. H. Kellogg, Battle Creek, Mich.; Dr. Julia Plummer, Boston, Mass.; Department Evangelist, Dr. Kate C. Bushnell, Evanston, Ill.; Legal Adviser, Mrs. Ada M. Bittenbender, Washington, D. C.; Industrial Homes, Mrs. Lydia R. Clark, Northfield, Minn. Work among Mormon Women, Mrs. Angie F. Newman, Lincoln, Neb.; Lecturer, Mrs. Frances McCready Harris, 218 DeGraw St., Brooklyn, N. Y.; Purity in Literature, Mrs. Ada H. Kepley, Effingham, Ill.; Travelers' Aid, Miss Maud Remington, Baraboo, Wis.

V. SOCIAL.

Parlor Meetings—Mrs. Anna M. Hammer, 23 Rowland St., Newark, N. J.; Associate, Madame Demorest, 15 East 14th St., New York City.

State and County Fairs—Mrs. Josephine R. Nichols, 673 N. Meridian St., Indianapolis, Ind.; Associate, Mrs. Marion McBride, 179 Fremont St., Boston, Mass.; Secretary, Miss Mary I. Stille, Westchester, Pa.

VI. LEGAL.

Legislation and Petitions—Mrs. Ada M. Bittenbender, Washington, D. C.

Franchise—Mrs. S. S. Fessenden, Malden, Mass.; Lecturer, Mrs. Zerelda G. Wallace, Cataract, Ind.

Peace and International Arbitration.—Mrs. Hannah J. Bailey, Winthrop Center, Maine; Lecturer, Mrs. Mary A. Woodbridge, Ravenna, Ohio.

STANDING COMMITTEES.

Railroad Rates—Miss Helen L. Hood, 161 La Salle St., Chicago, Ill.

On Appropriations—Chairman, Miss Esther Pugh, 161 La Salle St., Chicago, Ill.; Mrs. Mary T. Burt, 202 W. 133rd St., New York City. Mrs. Louise S. Rounds, 161 La Salle St., Chicago, Ill.; Mrs. Fannie H. Rastall, Topeka, Kan.

Advisory Committee—Mrs. Clara C. Hoffman, Kansas City, Mo.; Mrs. Louise S. Rounds, 161 La Salle St., Chicago, Ill.; Mrs. Mary T. Lathrap, Jackson, Mich.

National Temperance Hospital and Training School for Nurses—Chairman of Committee, Mrs. J. B. Hobbs, 343 La Salle Ave., Chicago, Ill. Treasurer, Mrs. L. H. Plumb, Streator, Ill.

誌　學

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百三十六號
明治二十三年十月廿五日發兌

社説

完人物

基督（中）

基督の資性を考ふるに、二個の說あり。一は云く、彼は神子なりと。二は云く、聖人なりと。二つの論議相逆らひ、和する所ろを知らず。之によつて、一は基督教の教義を迷誤に出づとし之を信奉しがたしと云ふ。他は、此最重事を信ぜざる者は即ち基督教の大本理を無みする者と云ひ、大に之を斥ぞく。左れど、吾人が愚考する所によれば、二種の說客、斯る論議の爲に相分るゝに先だち、共に先一慮すべきことありと。夫神子と云ひ、聖人と云ふ、必竟腦中に會得したる觀念に對し、稱號上の命名を當てたるに過ぎず。抑々神子と云へる觀念と聖人と云へる觀念との間に、果して幾干の大懸隔ありや、未だ之を比較したることあらず、亦如何なる資性、以上を神子の性とし、如何なる資性、以下を聖人の質とし、二者の資性を判然何等の點に於て區別すべきやの標準亦未だ定まらざる也。此時に當り、卒然として一論者云く、彼れ神子なりと、之を否むもの卒然として亦云く、否な聖人なりと。二者此簡短ある不同言語によりて忽ち相離れ、則ち胡越秦楚を以て敵視するに至らんと、未だ用意十分と云ふこと能はず。惟へらく、彼の之を聖人とするものにして、暫らく其の聖人とするの所以を說明し、基督の言行に對する敬意崇念の在る所を露白せしめば、神子論者が崇敬する所以と未だ左程莫大なる懸隔あらざるべしと、思はる。啻に相違なきのみならず、或る時に於ては、之を神子と崇むと云ふもの反つて基督の美所高處を覺知すること少なく、聖人として之に拜事するの徒寧ろ多く其高美を感悟することもあるべし。此時に於ては、主よ主よと召ものゝ未だ必らずしも其弟子にあらず、故に單之を神子なりと稱するの故を以て輙はち救はるべしとも思へぬとなり。聖經を通覽するに、基督自から稱して神子と號せしこと一度もなし、反つて「人の子」と稱へたること七十餘回に上る。基督は人に求めて自己を神の子とせよと言はず、寧しろ事々しく傳播して徒らに大業に言ひ囃すこと勿れと制禁したり。基督の求めたる所ろは、「吾言を信ぜよ、もし言を信ずること能はずば爲す事を見て信ぜよ」と言へる處ろにあり、而して基督の言

行は、明らかに上帝の存在、其愛、人類の罪惡、及び其救ひの途を示すことを旨とせり。故に吾人が彼に就いて先づ第一に考ふべき所のものは、即はち此の四の大問題也。吾人もし此等の四問題に關する彼が言を直ちに信ずることを得ば、幸はいなり。若し直ちに信ずること能はずば、彼が一生の品行品格を見て之を熟慮深察すべし、彼が吾人后生に求る所ろ即はち之のみ、必らずしも、神子、もしくは聖人の命名を議定せよと言ふの謂にはあらざる也。

左れば、彼の二種の説客が、たゞ其命くる所ろの稱號を異にするの故を以て、直ちに相別るゝが如きは、基督敎の大事を余所にして、たゞ末節に拘處するの嫌なくんばあらず、頗ぶる感心しがたき處置と云ふべきもの也。

歷史上の一人物

佛蘭西のレーナン、基督の事蹟に付き疑を挾はさむ所ろ多かりき。則はち、親しく其舊跡を尋ね、事を實歷の上に確かめんとて、或る年ガレリアに到り、久しく其地に滯留して細かに常年の證跡を研究し、遂に憮然長歎して云へらく、

基督一生の歷史は、遥かに之を想望しつる時は、宛がら雲漠々の間、實際なき妄想の世界を望むが如かりとはへ雖ど今は確固實在の有形跡となりて、目前余れを驚かす斗りに明かに見ゆ、又聖經の本文と、此等舊跡の地と著るしく符合する事を見れば、余が感、一の默示を受けたる心地し、約翰の福音の極めて確かなることを確認し、亦た馬太、馬可の二福音も同樣にして、共に是れ理想想像上の一人物を畫けるものにあらざることを確認したり、而して今ま余が眼前には、驚ろくべき一人物、生きて活働することを認たむる也。

レーナン尙ほ如此く言へり。二千年の昔し、耶蘇基督なるもの確かに實在せしこと、重に其言行を記載したる新約全書は、確實にして僞はりなく、皆な其の弟子が眞實に執筆したるものなる事は、今やもはや斷定して動かしがたき眞理となれり。歷史、文學、地理、口傳、敎會、等皆な之を確證す。西洋文明國の總べての批評、皆な之を堅認す。

聖經は一の言行錄

新約全書は基督の言行錄也、固より弟子等の思想及想像をも附錄すと云へど、其重大なる部分は即はち基督の言行を錄することを旨とし、專心一意、たゞ正直に在りし事を書留めたり、之を以て、新約全書を、四十二章經もしくは論語の匹ひに見解するは誤まりなり、此書初めより經文として記載したる者

にあらず、たゞ其言行を筆記せんことを欲して錄したるに過ぎざる也。

而して其筆記は、不十分なりと云はざるを得ず、固より之に誤まりありとは言はず、然れども其の十分ならざることは弟子すでに自ら告白したり。ヨハネ、其書の冒頭に云く、

我儕クリストの榮を見るに、實に父の生たまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理とにて充てり。

斯く筆を起し、謹嚴粛敬の念ひを以て、主の善行の極めて重大なるものを寫し來り、遂に望之彌高、穿之彌堅の感に堪へず、絶筆の際み、叫びて云く、

イエスの爲し、事は此等の外になほ許多あり若之を一々記しなば其書この世に載せ盡すこと能はじと意ふ也。

夫れ愛あるもの獨り能く人を知る。十二弟子中尤とも能く基督を知れるものは、特に愛に富めるヨハネ其人ならずんばあらず。而して彼が基督を知り、其言行を寫すの文字尚ほすでに如此く、其福音として遺こす所ろのものも只だ基督の言行の万一を述ぶるに過ぎずと云へり。左れば吾人が基督の人となりを追考するに當つては、常にたゞ不十分なる言行錄によりて其全斑を推想するの外なきことを覺悟し、豫じめ經文崇拜の僻見に陷いらざることを要す。

女學の勸め

娘を持てる父兄諸君に告ぐ

一つ二つ秋の木の葉落ち初め、天地何となうさびしき心地する今日此頃ろ、田の稻は實りよく、木々の果實は色つくと云へど、夏休みの前に行くを送りたる女學生諸子、今に尚ほ歸らぬも多く、行くに先だちて友達の何某やらんをも連れ歸るべしなど云へる其友人も、未だ來ず、如何なれば案じ止むことなき昨日の日暮れがた、ねぐらに入らんとする鷄を驚ろかせ、檐下にうづくまる犬に首らあげさせて、郵便脚夫、一つの文を持ち來ぬ。

開き見れば、女學生の筆にて、歸京延引の止みがたき故よしを細かに記し、所ろ〴〵涙にじみて、紙面に限りなきの歎きを寫し、天外万里、友なく、人なきの境界に居て、都を想ふ愛着の執心、魂を消す許りなりと喞ち、悲しきうちに憂ひを含ませ、落膽の下に慷慨の情を躍らせ、讀む所ろの己れをして、血涙縷々禁ずること能はざらしむ。彼女は云く、妾が家未だ巨万の富あらずと云ど、尙一郷の豪家にして、子弟を教育

するの資あり、此を以て兄二人は大學を卒業し、弟は現に高等中學に在り、末の弟は今年尋常中學に入りぬ。去る頃ろ世の中一時に西洋めきて女子敎育の事狂ふ斗りに流行せし頃ほひ、父は都より歸りて俄かに妾が頭らを束髮に直させ、小さき妹に洋服を着せ。妾にもと仰せありぬ、左れど妾は洋服を好まず。亦た舞踏を習へよと命ありしかど、之も仰せに背きぬ。たゞ都に上りて學問せよと御語ばありしときは、飛立つ斗りにうれしくて、すぐさま用意し、やがて先生の膝下に到りて、ねもころなる御敎を聞くこととなりぬ、西洋の學問に華美なるもあれど、また純潔此上なきもあり。其純潔なるに心を洗ひて日ましに志を高くし、昔しの吾を顧みて夜な〳〵汗を潤ほし、二年の學窓に居て、學びしと悟りし事數を知らず。今年初めて家に歸り、父母を見奉まつりてより、昔し思ひ足らずして不孝にてありし罪を一々わび、昔し潔ぎよからずしてお二方を難ませたる所行を在のまゝに悔ひ、今後切ては兩親の御心を休め、父母の德をいよ〳〵顯さんことを、さま〴〵の望を以て家に歸りぬ。國元のけしき二年前と異なり、万づ復古して幼なき時の樣に同じ。父は保守黨の說に加擔し、万事進歩を嫌ひ、成べく昔し風にせよとて、妾が學問は最早用なき者のやうに言ひ玉へり。髮も島田こそ好けれ、衣物も紋付こそ上品なれ、出あるきはせぬ方にせよ、讀書は之にて十分ならめ、たゞ縫針を巧みにし、茶花に堪能し、かたわら家の助けせよと仰せあり。妹も尋常小學丈けにて事足りなん、其の上は直ぐさま仕立屋に入門せよと、早や今より預定ありぬ。かゝる場合なれば、妾わが二度び上京せんと思ひもよらず、家に居ても物の本を讀めば、自づから御氣色よろしからず、臺所元にて働らけば一と方ならぬ御賞賛あり。むかし、學問と云ふものゝ味ひを少しも知らず、女性の務めと云ふとの眞を悟らず、たゞ氣鬱辛勞のいとま〳〵、手さきに僅か斗りの業を爲し、女の義務畢れりと思ひし頃は、今日と同じ生活を爲すと云へど、夢め不滿足に感じつることと候はじ。左れど、今はた貧しきものに寶を見せ而してのち其貧しきに安んぜよと命じ、憂ふる人に樂しみを味わせ而して亦た其憂ひに沈めよと制するとの如く、心得なき昔しに比ふて一層の苦しみを覺へ侍る。何某は今ま踊りの稽古に執心し、何某は又た三味線に身を入れ、其父母と共に此に凝りて餘念なきかの如く、一とたび其方々のお話しを承われば、人はかゝる淺墓の事にて一生を送るべきものにやと、心ぼそく歎かれぬるのみ

にて候。世はいつ迄でかゝるさまにて續き申すべきや、女學生は再たび昔しの卑屈に復り申すべきものにや。語る友あく、語らば狂へりとのみ誹られ、家に居ても怏々として樂しきことなく、父母に對し勿躰なき顔附のみ致し居り侍る。雁は鳴き渡れど妾はに翼さなく、文は通へども身を動かすとかたく、朝た早く講堂にて友と文まなびし心地、夕べおそく庭面にて月をながめし思ひ、歌うたひしたのしみ、野邊に遊びし記臆など、つぎ〳〵に心に浮びて、くるしきこと限りなく、筆にも紙にも述べがたき心地のいたし侍る、と。

あゝ、かゝる女學生の父兄諸君、公等は時勢の流行に連れて娘に學問させ、又其流行につれて之を家に閉ぢ込む。愛孃を玩弄びものとするは親の仁にあらず。但し昔し一時の熱に浮され、今ま其熱さめて幾分の覺悟を爲すは、固より宜し、之れ後悔にして善に歸りたるがゆえ也。左れど女子を悉とく昔し風にせんとするは亦是れ一種の流行にして、久しくつゞくことあし。今ま僅かの反動によりて再たび慌て、乍まち其愛孃の學問を全く中止せしむることありては、今後半年もしくは一年にして、時勢正しく中庸の地に復するとき、公等亦もや大ひなる悔あらんとす。鹿鳴館風に教育するは固より不可なり、踏舞専門に教育するも亦固より不可なり、英語のみを多く教ゆることの惡しきは數年前より分り居たり。かゝる西洋心醉の教育は心ある人の夙に擯斥したる所ろにして、不肖女學雜誌の如きはいつも之に反對したり。左れど今日其反動の波打寄するとき、喫驚して悉とく足を擧げ、女學を全く止めんとするは、非常なる不覺悟なり。是迄の學校が餘り西洋めきしならば、宜しく日本風の學校に轉ぜしむべし、左れど大昔の女塾に入るゝは亦た極端に走るの誤まりなり。過ぎたるは共に不可なり、宜しく中庸に歸りて其愛孃を適正至當の學びの庭に入らしむべし。兎に角、今に於て其學問を全廢せしむるが如きは大ひなる心得違ひなり、かゝる人は遠からずして亦た又大後悔するの時あるべし。たゞ氣の毒なるは、かゝる人の孃君にて、切角大切の時機を空なる試驗の爲めに徒らに奪ひ去られんとす。父君再び後悔するの日は、娘君すでに學問の期を過ぎて遠からんとす。娘君亦た反る可らず、父君亦た挽回す可らず。娘君空しく恨みを飲み、無學の頭腦に、嫁入道具を添えて、時世後れの少年に嫁ぎ、一生を人後に送らんとす、而して其父は終生の遺憾を償ふと能はず。あゝ愛すべき女學生をして此の大不幸に陥らしめんとする者は抑そも誰ぞや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

左は甞て某處にて演說ありしもの、筆記にて此頃羅馬字雜誌にも掲載ありし事なるが、今ま同氏の寄送を請け更に右雜誌の承諾を經て彼より轉載す。

日本繪の歴史概略

末松謙澄

今日此學校の校長から何かお話しをするやうにとのヿで御座りましたが修身の事其他あなた方の御心得になるべき事柄は他の博士方が折々お話を致されますから私がお話ししても格別のヿは御座いません因て私は今日他の事をお話し致しますあなた方は繪の稽古もなされるやうで御座いますから日本の繪畵の事に就てあなた方が大概お心得にあッて宜しいと思ふヿをお話しします。

是まで私ことは西洋人に逢て話しをするに繪の事に付てはまことに面目を失ふヿが多い渠等が申すに日本の書生方は自分の國の名高い畵工の名さへ知らない……少しも美術の思想がないあれでどうなるものか一體に敎育を受けたる者は一と通り其國々て有名なる畵工の名位ひは知て居らなければならぬ日本人も只昔しの太閤さまの知慧のあつた事や加藤清正の强かッたヿを知て居るばかりでは何にもならない少し敎育の仕方を變たらよからう抔と評します私も美術の事は聊か好ではありましたが日本の畵工の名高い人は餘り研究したヿも御座いませなんだそれ故に西洋人が折々日本の繪を出してこれは誰れの書いたのだと云はれて赤面するヿがある是れではならぬから研究しやうと思ふ心が生じた啻私一人ではない日本では私のやうな人が澤山あります已に先達て私の家に緒方光琳の書いた繪を掛けておいた處が或る人が見てこれは大變良い繪のやうだと云つて褒めて其印に「方祝」と書いてあるのを見て(方祝は光琳の一名で御坐います)「之は誰れの書いたのだ」といふから「光琳のだ」と申した處が「光琳とは誰れだ」と問はれました其問ふた人は誰と云へば立派な學者でありますが其人でさへ光琳と云ふ名さへ知らなかつたくらいでありますから一般に畵工の事を知らない人が多いに違ひない故に今日は日本の有名なる畵工であなた方が御承知になつたらお爲めにならうといふ人を數へ立てゝお話ししやうと思ふあなた方がこれを覺へておいでになれば上野に展覧會があつた時あの畵工はかういふ人であるといふヿを知るの役に立ちます西洋では夏になると始終繪畵展覧會があるから御孃さん方がよく縱覽に行つて迹で誰れの繪はだふであつたとか誰れの繪

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は斯うであつたとか互に評し合ふて樂んで居る其話しよりして交際上の話しも出來て大層面白いあなた方も日本の有名なる畫工の名や繪の善惡などを御承知にあれば御樂みにもならうと思ふ勿論私は有名の畫工ばかり云ふから定めしあなた方の最早御承知の事もありませうから其邊は勘辨を願ひます其上私は繪の學問は決して深くは存じては居りませぬから是も左樣御思ひ置き被下たし。

日本の畫工の事を申しまするに餘程古いもので御坐いますがザット之を三ッの時に分つて宜しう御坐いませう即ち上は王代にて其れも奈良の時が一番盛んでそれから平安の都になつて即ち桓武天皇が都を御遷しになつた少し後の頃の畫工それから足利の末にあつて義政公といふ（東山に居た人で京都に金閣寺を御建てになつた人）人の頃が一番盛んであつた其次ぎは徳川の世になつてからである先づ一番古い皇代の時のとから御話しゝませう。

皇代の畫工で名高い人も隨分ありましたが巨勢金岡といふ人がある巨勢は氏で金岡は名であつてそれは有名な人である私が見ましたのでは大和の法隆寺といふ聖德太子の建てた寺がある此寺に金岡の書いた赤い蓮と鷺の繪があるこれは支那風の氣も帶びて居る此人は花鳥の外に佛像を書くのが上手で御坐いますこの巨勢家は數代續きました。

それからタクマ家と云ふがあるタクマは宅間といふ字を書くのもあれば詫麻といふ字を書くのもありますがそれは同じ名氏で御坐います此家は數代わりて其名も高く殊に佛畫の方で名があります。

次は土佐家で御坐います土佐家はあなた方も御承知で御座いませう即ち土佐流の繪だこれは昔しは春日と稱へて居ました春日の繪所と云はれた春日で此春日の何代目からか土佐と變りました土佐から芝といふ家も住吉といふのも出たこれは大和繪といふので純粹の日本繪である先づ是れ二つが皇代の時の名高い畫工の筋で御坐います今少しこれを委しく申せば土佐の中で一番名高いのはまづ基光といふ人であります此の家では「光」と云ふ字の付く名の人が多い故に「光」の字が付けば大概土佐家の繪だといふとを御承知になつて宜う御坐います土佐家には種々の書物がある花鳥などもごく得手で御坐いますが大抵彩色繪である其他に御雛樣の出たやうな繪があります屋根のない家の下に御公卿さんが居るのが書いてあるからいふ風の繪があつたら大抵土佐家の繪だと思召して宜しい土

七

佐の中から別れて出た芝、住吉の類も大抵似寄ッた繪で御坐います基光の次ぎに光長といふ人がある此人は名高い人で御座います此人の頃までは春日と稱へて居りましたが併し後世から論ずると矢張土佐派と云います此後の土佐家の人は多くは名の中に「光」といふ字を付けたが「光」といふ字の付かないで經隆といふ人がありました此人が始めて土佐と云ふ氏を付けて土佐となりましたそれから代々續いて光信といふ人が出ました此人は餘程エライ人で御承知の狩野正信即ち古法眼と云ふ人の舅さんで御坐います此人の娘が狩野法眼元信の細君になりました此細君は女でこそあれ千代女畫名は光久と云ふて矢張り畫工であッた土佐流の繪もかき又花鳥などは夫の正信を學びて狩野流の繪もかきました其頃後藤といふ目貫きなどを彫る金細工をする名高い人がありました狩野元信の妹が此後藤の嫁になッて元信の細君が後藤の彫刻物の下繪をかいて兩家の聯絡を通じましたともありますそうして其頃土佐の光信の子が未だちいさくて繪所の預りを勤めることが出來ないから狩野正信が預かつたともあッて互に相助け合ッたともありますが其後土佐家で名高い人は光起と云ふ此人は舊幕時代の人で探幽などゝ同じ時代の人で御座います光起は人物でも花鳥でも能くかきました光長、光信、光起、の三人を土佐の三傑と云ひますそうです土佐家ではまづ此等の人が一番名高ひので御坐います。

それから宅間の方に至ては大抵佛畫で御坐います夫の宇治の鳳凰堂は餘程古い建築であるが其中の壁の繪は私は正物を見た事がありますが是は宅間爲成のかいたので御座います其外にも宅間のかいた佛畫が折節遺ッて居ります宅間の家には初めは「爲」といふ字の付いた名の人が多い又「賀」の字の付いた名の人も多くある即ち永賀、淨賀などの類です此處に御覽なさるは國華といふ美術雜誌で此卷に鳳凰堂の壁の繪も鳳凰堂の外部形ちも出て居りますこれが鳳凰堂の繪で御坐いますこれは壁にかいてある佛さまの繪で御坐います觀音さまだの佛さまだのが餘程良く出來て居ります此處にもケ樣な圖がありますこれも宅間永賀と云ふ人の書いた繪で御坐いますこれ等は皆昔しの皇代の時の繪です。（以下次號）。

割烹學校

みさを

其教授する所、生徒の爲す所。

現今諸方に割烹の事を教ゆる學校あり、而して今日教授する

所、講習する所は大ひに曩日と異るを見る。即はち其先きには只割烹の方法を講説し、生徒之を聽き次で教師手づから實際に試み、生徒は之を傍觀せるのみ。斯る教授なりしが故に生徒十中八九は實際に當りて爲し得る所其入校せし所と大差なかりき、豈其教へし所を課業と云ふ可けんや。今や大ひに然らず、其講修する所課業と稱するに耻ぢず、實際に教ゆる所只に割烹の方法のみならで、其學理を講ず、始めに教師方法を説き生徒は教師の眼前に於て之を實際になし、其學理を究問し、何故に其方法は他に勝てよきやをも理解し得るに至る、

三種の課程

割烹學校の完成せる所にありては三種以上の課程あり、一課程に十有餘種の課業あり、生徒は始めに最も容易なる課程を修め、次第に進んで高尙なるものを修むるの仕組なり、女生諸子にして三課程を修め終らんには將來一家の良妻たるを得るは妾が證かに保證する所ろ也。イウイング夫人云ひけらく「令娘をしてよき料理人たらしめば家庭に最もよき助けを與ふ」と、蓋し故あり。

第一の課程

割烹學校に於て第一に教ふる所は火を焼くの方法なり、即ち火を焼くの始めより、火力の程度、其扱ひ方等に至る迄精しく講ず、亦薪の種類、灰の事、竈の造法、爐の理、鐵竈の磨き方等を教ゆ、是悉く日常必要の事たるは讀者の偏く知らるゝ所ならん。

次で種々の割烹法を順次に教ふ、即ち煮る事、蒸す事、暖むる事、燒く事等あり、未だ之を學ばぬ者は或は其殊更に學ぶの必要なしと云はん、今試に煮る事につき一例を示さん、通常教授に用ゆる物は馬鈴薯あり、先づ始めに其質と湯の沸騰する理由を説き、沸騰前後の心得より煮へ盡す迄の事悉く教ゆ、次で食台に備ふるの方法を講ず、是割烹法と等く肝要の事なり、蒸餅を燒く事につきては最も教授時間を要する事多し、課業時間は一時間半より長き事稀なるが故に教師手づから燒て生徒に示すは難し、されど教師は常に其捏ねたる蒸餅を教場に持參し、生徒各次の手に渡して見せしむ、妾は生徒に告げて手づから捏ね試みしむ。

第二、第三課程

修むるの難易、兩者殆んど違ふなし、始の課程に加へて此二つを終らば最上の料理人たるを得べし。最後に學ぶ所は菓子、麵食、クリーム等の製法なり、要するに許多の割烹法あれど一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も無用なるものなし、之に加ふるに殘餘の食物を扱ふ方法を敎ふ、是家政上最も大切の事柄にして女子の知るべき所なり其他諸道具の用法、食物の質、價値等も知るを要す。現今ニウヨークに二ッの割烹學校あり、一は割烹を専門となし、他は諸學科中の一課に列す、其他諸方に割烹學校ありて益々盛大に趣き、世人漸く其必要を認めんとす。

是シャーウッド夫人が起草して「シャトーカン」雜誌に投寄せるものゝ大意なり、割烹の事未た我國人の注意する處とならず、されど久しからずして我國に於ても之を學ぶの必要を知るものあらん、東京府下に料理の方法を敎ふる所あるや否やさ、端書を投じて我社に問ひ來るもの近來頗る多し、されど妾は未だ之を敎ふる所あるを聞かず、他日其必要を見るの日には必らず之を敎ふる所起らん、妾は閲讀せるまゝ譯出して暫く後日を待つ。

涙滴々

○熊野の母の手簡

まさを

謠曲傳ふるところ、熊野は内大臣宗盛の寵姫なり、其母これに暇乞させんとするも、宗盛ゆるさず、最後に此手簡を送りて、漸く之が許しを得しとなん。これ素、作者の想像になりしものならんも、文章古雅にして愛すべく、よく人情の微を寫して一唱三嘆、くりかへし〱て轉た悲哀にたへず。

甘泉殿（漢武帝の李夫人を住まはせしところ）の春の夜の夢、心をくだく端となり、驪山宮（唐玄宗の楊貴妃を居らしめしところの）の秋の夜の月、終なきにしもあらず。末世一代敎主の如來（釋迦をいふ）も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにしきさらぎの頃申せし如く、何とやらん此春は、年古りまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心よはき、老の鶯逢ふことも、涙にむせぶばかりなり。唯然るべくば好き樣に申し、志ばしのお暇を賜りて、今一度まみえおはしませ、さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずば、孝行にもはづれ給ふべし。唯かへす〲も命のうちに今一度、見まいらせ度こそ候へとよ。老いぬればさらぬ別のありといへば、いよ〱見まくほしき君かなと、古事（伊勢物語にある在原業平の歌に、世の中にさらぬ別れのなくもがな千代とも祈る人の子のため、とあるをいふ）までも思ひ出の涙ながら書き留む。

事業の成否、女子多く失敗する耶（上）

氷山人

米國に一新聞あり、嘗て一項を掲載し、女子は事業を爲して成功し難しと述べたり、エム、ビー、キャツスルと云へる人之を駁して、亦某新聞に投ぜり、左に記するは其駁文なり、說く所の可否如何は讀者の判するに任す

過日某日々新聞に一文あり、女子に關して評する所ありき、是

思ふに世人多數の意見を代表するものならん、吾人は之より聊か駁擊を試みん、論者曰く「女子多くは失敗せり、其成功せるもの殆んど稀なり」と、敢て問ふ女子にして失敗し易しと云はゞ男子はよく成功したるか、男子の爲す所ろ悉く成功せしと云ふか、何ぞ知らん、諸種の事業に於て古來許多の失敗は男子に關はるもの甚た多きを、倘女子は失敗する事多しと云はゞ乞ふ事實を見よ。

論者亦曰く「農業、牧畜、學術、發明、商業、建築、蓄財等の諸事の記者、著述家にして女子たるもの殆んどあるなし」と嗚呼何ぞ然らん。

論者見ずや、ヴァン、レンセリーア夫人は常に建築學につき記述して某雜誌に掲け、世人喜んで之を閲讀する事を、亦見ずや今日女子の發明する所日に月に多きを加へ、專賣權を得るもの頻りに增す事を、モルガン孃はニウヨークにあつて有名の獸醫にして「ニウヨーク」新聞の通信者たり、インディアナ州にシー、メリデス夫人あり、實業の諸問題に精し、其發發する所の新紙は有益の事項にて滿つ、コロラーにワルレン夫人あり富貴を以て知らる、今日有する所の財產一千万弗に下らずと、是彼女が牧畜事業を爲して得たる所なり、巨大の事業を成せし女子もとより多からず、只普通の程度迄成功せしもの多きのみ、されど此女子に於てのみ然るに非ず男子とても巨大の事業を遂げしは甚だ少し、吾人は知る、農業に於て成功せる四女傑あるを、其三人は寡婦にして生計の爲めに農耕し、一人は未た青齡にして必要ありて農者となりしものにあらず、寧ろ自ら撰んで之を爲せしものなり。

能はざる事四つ

論者亦曰く女子多くは其任を盡す能はず、良人の爲めに家庭を幸福になす能はず、家事を總督する能はず、其子を養育する能はずと、其家を幸福ならしむるが如きは眞に難事、男子專ら之に任ずるも或は成功する事なけん、吾人は知る、貨物の傍に坐するの外、亦爲すなきの男子あるを、店頭に默坐するの外、爲すなきの男子あるを知る、閑水に釣魚して優々爲すなきの男子あるを知る、今試に眼を女界に轉じて見一見せよ、クラ、カルビイ夫人は米國屈指の新聞記者に非ずや、夫人曰く「妾の成功は忍耐と勉强とによる」「妾は勞力する事多くして收得の少きを厭はず、社會人民の偏癖邪曲を除き、光明正忠の理想を抱かしめんと務めぬ云々」と、吾人の見る所に依れば女子の勞役盡力する新聞紙にして大ひに勢力あるもの

少なからず「ポストン、トラヴェラー」の社説は女子の手に成る、而して其世人に勢力ある著るし、殊に田舍の新聞雜誌は女子に最も適する所と思ふ、蓋し女子の思想自ら家庭の事情に精緻にして地方新紙の最要事項なればなり、吾人一雜誌を發兌し來る、其記事多ほく家內に於て編む、故に平常家族と共に編輯の事に當る、男子にして一眼以て家庭を觀察し、一眼は之を幼兒の保育に委し、左耳に庖厨の事を聞き、右耳は來客の應接に用ひ、而して何妨害せらるゝなく新聞事業に當り得るもの果してこれありや、されど女子は此點に於て著しき長所を有し、多端繁雜の事務に當るを得。

一身兩事に任ず

ハーバート夫人は新聞記者を爲し、同時に清福の家庭を組成す、嘗てブラッドウェル夫人新聞を發刊するに當り、其盡す所新聞に偏せずんば、家事に傾かん、兩事に成功を見る事蓋し難からんと、疑はぬ人はなかりき、而して其結果は如何、只女子はよく新聞記者となり、子女敎育を司り、亦同時に家庭總督者とあり得るを證明せしのみ。レスリー夫人は十有餘の新聞を總督し。デモレスト夫人は書物發行の大事業を負ふ、メープス、ダッチ女史あり、世界無双の大雜誌爲に活氣を帶ぶ。メリーブース孃は「ハーパー、スパサー」雜誌の主筆に非ずや。ハルラント女史、小兒雜誌の記者たり、如何なる原則かあつて女子が新聞記者となるを制せしや。

女子は新聞記者たるの資格なしといふ

論者曰く近來女子の智識少く進み、「久しく男子の占領せる位置を掠奪し、以て之を橫領す」と、亦末節に曰く「通常の婦女子は通常の男子の如く之が任に當るを得べし、されど女子は決して新聞記者たるの資格を有せず、記者の任眞に貴重なり、而して女子の適任は此處に非ず」と、是豈正當の言ならんや、若記者の任にして適せずば何ぞ女子が此に當りたるや、女子が記者たるに至れる者偏に其適任あるを證明するものに非ずや、若男女何れか此任を捨つべくんば、論者先づ記者の任を去るべきのみ。

文學者の不幸

雲峯生

「驕を退けて財をもたず、世を貪らづらんぞいみじかるべき、昔より賢き人の富めるは稀なり、」昔の法師斯く云たりけるとぞ。吾人は折にふれて文學史を瞯ふ毎に未だ嘗て此感なくんば有ず、人誰か富貴安逸を欲せざらん、而して貧を樂しみ、勞

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

苦を厭はざる所以の者は、他に深く樂しむ所あればなり。人誰か榮耀利達を望まざらん、而して身賤しきに居り、欠乏を意とせざる所以のものは、別に好む所あればなり。古來無數の文學者多くは富貴安逸を捨て、榮耀利達を顧りみざる徒なり、是文學者の眞相のみ、左手は之を寶庫に投じ、右手を以て文學に從事するが如きは、未だ文學の味ひを知るものに非ず、文學を知らざる者何ぞ文學者たらん、人如何でか兩主に事ふるを得ん、世の文學者たらんと欲するもの、先づ富貴利達を慕ふの念慮を絕て、然らずんば文學の事を捨てよ。

好んで貧賤に處する者あり

蓋し人富貴なれば思慮を煩はす事繁く、爲めに文學思想の發達を害するならん、是古來の文學者が富貴を捨て貧賤に甘んじたる所以なり、貧富貴賤は素より比較上の語なり、自ら富貴なりと思ふ者、更らに富貴の人に比すれば忽ち貧賤なるを感じ、一層富貴ならん事を望むべし、されど眞に貧賤を樂しむ者に至つては財寶堆をなすも之を見ること塵土の如し、衆人を凌ぐの榮位も敢て望まざるが如し。英國の如く商業盛大なる國に在つては富の勢力甚はだ強よく、金力のある所即はち權利名聲の歸する所なり、されど此に在つて尙貧賤に甘んぜし人多し、モンテスキユー嘗て英國に遊び、云へる事あり、若余をして英國に生れしめたりせば莫大の財富を得たらん、されど余は佛國に生れて身の富貴ならざるを悔ひずと。其心情亦美はしき哉。

寺院と文學

日夜孜々として財貨に心を配し、家族の系累を意とせざるべからず、之より生ずる千障萬害は人をして沈思深想する能はざらしむ、此故に古人は寺院に於て文學の事に從ひけん、名作と云ひ大著と稱するもの寺院に於て成れるぞ多かる。西洋に於てはモントファウコン、カルメット、フロリッツの如き最も著るしき例と云ふべし、我國に於ても文學に名ある僧侶甚だ多し、西行、兼好、素性の如きはよく人の知る所、其他尙僧侶にして文學者たりし者多からん。彼等寺院に世を避けしもの必らずしも厭世の心よりせしに非ず、人を恨み、世を墓なみし故にも非ず、一片文學を樂しむの心より繁雜喧騷の世を脫し、幽境閑界を寺院に求めしなり。エヴエツン世を捨て同志の徒を集て一學舍を閑地に設け、各樂む所の文學を專にせんと欲せり。往古希臘の人ソホクルス年老ひて尙深く勉學に志し、遂に一家族の系累あるを忘れ、法庭に訴へら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れしとぞ。「ひとり燈のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ」と、兼好法師の云はれたるぞ、誠に文學を好む人なる。吾人は世人に向つて猥りに世を逃れ、社會を去れと云はず、文學を好まざるもの如何に世を捨るとも遂に少しの益あるなし。

財寶取る所なし

コーナン嘗て貧賤に甘んじて勉學す、一機會あり、父祖傳來の財產を所領せざるべからざるに至れり、彼心思を勞する事甚だ多く、古語の研究も意に任せぬ樣ありけり、彼遂に意を決して之を人に讓與せり、親戚に頑冥の徒あり、大ひに不同意を唱へ、法廷に訴へて其財を恣にするを責めたり、コーナン素より罪なし、其好む所を爲せり。倩々察するに人貧賤にして勞苦する時は世の所謂不幸に陷るもの、其才學に至つては大ひに發達するを見る、ゴルドニ常に戯曲を著はすを好み、云ひける樣余は之を爲すを以て無上の快樂となす、豈他の地位を望む事をせんやと。ヘールは万世文學の祖先なり、若きより云へり、「不幸恐るゝに足らず、幸運厚く望むを要せず」と遂に富貴と家族の快樂は捨てゝ顧みる所あらざりき、されど後世幾百年の後まで彼を慕ふ者絕へず、彼の芳聲墜る事なし。ヒユーム、ギッボン等も亦富貴を顧みるの不可なるを知れり、ヒユーム云ひけらく「余の收入は學者の一身を支給するに足る、學者は他の人に比して入費を要する事少なし」と。ギッボンは「余は富貴ならざりしが故によく彼の任を果せり」と云へり、されば

貧賤は文學者の處すべき所なり

「家を富さんとならば良田を買ふを用ひず、書中自ら千鍾の粟あり、居を安くせんとならば、高堂を架するを用ひず、書中自ら黃金の家あり……」是昔儒の訓へし所、陳腐の言とは云へ、文學を好まん者が富貴を捨てゝ書を樂しむこそ誠に斯く感ずべきものなれ。若夫れ富貴をこれ求め、利達をこれ計り、身を俗界に投じ、名を塵世に貪るが如きは眞に文學者の耻づべき所とす、吾人は我國現時の文學を觀る毎に嘗て大家の出でん事を望まざる事なし、眞によく財貨浮名を捨て文學の事に熱中するの大家果して何時の世にか現はれん、吾人は大ひに之を待つ。

磯畑の介さいふ先生さ讓過和尚さ交り親しかりしが、或日計らず道にて出合ひ橋を渡るに相讓らんさして誤て川の中へ陷りたり。二人ながら川中にて起てり互に先づ辭儀をなして「マア貴公から岸へお上り下され」「マア〳〵貴公から〳〵」

社員ふみ子頃日京都に到り好き便りさて新島夫人を訪ひぬ。此の音づれは他に要談ありたる故にて紙上の讀者に告げ參らす可き爲の談話をなしたるには非れども偶然承り得たる事にて故新島先生の幼時の狀況を窺ふに足る談話一つ二つありたれば今猶新島先生を慕ふて忘るゝ能はざる讀者諸君の爲に同先生を忍ぶの材料にもさ、左に掲げぬ。

新島襄先生未亡人の談話

新島先生の疵痕　新島先生の顏面より頭部にかけて、大なる疵痕あるには、誰しも注目するとあるが、或人は此疵に就て、說を爲して曰く、個はこれ先生が、札幌より、桑港へ、到らる丶間に、船中に於て、船長より得られたる疵痕なりと。然るに今聞く所に依れば、全く左る事に非ず、此疵は、先生が、八歳計りの、頃にや在けむ、自邸の裏にある、塵芥溜の、傍にて遊戯し、誤つて逆まに、其塵芥溜に陷り、中に在りし杭にて突裂かれたる疵なりとぞ、其疵の非常に大なりしは、一旦縫ひたる疵口の中に、砂石等の殘り居り、全癒せざりし爲め、更に又、其下部を切りて、治療せられしが爲なりと、新嶋未亡人は語られき。

新島先生の結髮　新島先生十一歳の時、暑中に道場より、歸りがけ結髮床に至り、結髮せしめんとせられしに、暑中といひ、他を出歩行きて、炎天に曝されたる事あれば、元結を切ると仝時に、其の臭氣紛々として、髮結ひの鼻を衝きしと見へ、髮結ひは、思はず、アナ臭しと叫びたるに、新島先生之れを聞き、俄に立上り曰はる丶やう、止めよ髮は結ふに及ばずとて、髻を亂したるまゝ、歸宅せられ、物蔭に入りて手づから髻を束ね、兎角して、結び終りたり、始めての事といひ、小兒の手細工なれば、其不かつこういふ計なし、家内の人々之れを見て且笑ひ且諭し、頻りに、他をして結び更へしめん事を勸む、然れ共先生聽かず、毅然として曰く私しの頭は甚だ臭き由あれば、臭き頭を、人に嗅すは、氣の毒故、自ら之を結ぶにしかず、とはいひしもの丶、先生は其實左迄に不かつこうなりとは思はれざりしあり、然るに暫くして不圖淨水に行かんとて白壁の傍らを通り、日影に映じたる、自分の形容を見れば、成程人々の笑ふも尤もあり、前髮は甚敷前面に突出て、結たる元結のさきは三分ほども、殘り、しかも堅結びになりたる、髷のイチは、しだらなく、曲りくねりて、何か別に物を、載たるが如き狀したる、自分ながらも、をかしき形にてありしよと、さとりしもの丶、一旦人に結ばせじと、斷言したる廉もあり、遂に其儘になし置き、夫より後は、斷髮にならる丶迄、一切人には、髮に手を觸しめられざりしとなむ。個はこれ新島先生が、仝夫人に、生前笑ひながら、語り玉ひたる談話なりとぞ。（尙二項次號）。

禮論を見て

天知子

小笠原先生の禮論一編を讀んで感服せり、禮の本體實に武術の本義と少しも異なる事なし、是れを察するに禮の精神、禮の思想、禮の儀式と分れ居る事恰も武の精神、武の思想、武の儀式と區別するが如く見ゆ、是れ禮は原武道より發したるものあるが故其禮の精神に至ては武の精神と少しも異ある事なきの理なり、後世禮より出たる一の弊とも言ふべきは貴族的社會の空氣に感染して、重もに器械的に流れ頗る貴族的の臭氣加はり來し事是れなりき、明治破壞の一擊は悉く是れを打破りたれば、今の諸禮家は眞文明の空氣をもて一度是れを薰べ、再び區々たる末技を諸家に爭ふ事なく、大に繁を省きて簡潔なる者とし以て東洋日本の美禮を輝かさん事を望む、予が武藝の師より聽つる武禮の一端とも言ふべき、食事の時の心得を左に申すべし、今の無作法野卑なる書生一流の人々はせめて此の位ひは心得置くも無益にあらず、果して禮家の式と同じき所あるや否や、

食事の時避くべき件（いかにも小膽者と見へて見惰くき野卑なる舉動をいふ）

まどひ箸、菜を喰ふに箸迷ふことを言ふ
よこ箸、箸に着きたるものを横に甜る事をいふ
てふぶく箸、食事果てゝ箸を倒さに置く事をいふ
袖すり箸、右の方なる物を取るに箸を上へ向けし儘爲す事
菜の菜、菜を喰ふて直に他の菜を喰ふ事、汁も亦同じ
膳越し、膳の向ふに据へし膳より、本膳を越て物を取る事
もろ起し、椀と箸とを一時に取り上る事をいふ
箸あまり、一つ菜をいつ迄も食て椀を持つまゝ埒明ぬ事

あゝ感情

もみぢ

人は感情的の生物と兼てより承知し居たれど、斯迄とは思はざりき。哲學者いかめしく論じ、宗教家信切に說法すれど、實際の世相は大率ね人情によりて動くのみ、而して人の苦樂過半は情によりて來る、智性心意の上より發するは至つて弱く微かなる心地す、あゝ〱感情よ、汝ち何如なれば斯く人を燒き又人を氷らする哉。白骨化して枯木を生じ、寒鴉寂居してさびしき聲を發てど、倘ほ子の爲めに鳴く、大禪巨觀の聖僧と云ふと云へども、誰か情に動くものなからんや。左れば吾等は情を卑しむるとあく、亦之を壓屈せんとも思はず、單だ之を聖くし高くして純潔の理想に伴はせんとを祈る。

きよめぬ庭

うつけ

其二十八　西落寮主人

同じく人間と生れしものに、なに賢愚二つの區別はつきけん。賢なる人は世に用ゐられ、國家の爲、人民の爲、實業家となりては殖産工業の道を開き、學者となりては事物の道理、人の行ふ可き道筋を教へ。醫學者となりては人類の生命健康を保護し。政治家となりては民を安じ、禮樂を敷きて國を治め。おの〳〵其の億萬の爲致たすところ實に少からず。國に賢相あれば其國安く。良將軍あれば其軍強く。名醫あれば人命易く。大學者あれば道明かに。眞實業家あれば其國富む、とは何人も云ふことならむ。賢人と云へるものは恐ろしき者かな、唯一人二人該る良者のあるのみにて、既にさほどの効力あり、さればかゝる人を斗もて量り箕もてはくほどありたらんには、其國いかに强からん。つら〳〵考ふればまた然らじ。例之斗もて量り、箕もてはかんほど、賢人ありたりとも、若し其國民ことごとく愚ならんには、少數は多數に制せらるゝの理もて、決して前きの如くにはあるまじ。歐洲の諸國を見るに、賢人の數實に少しとは見えず。政治家と云ひ、大學者と云ひ、實業家と云ひ、ほと〳〵不足なきが如くなるに、なほ年々かれこれの絶ゆることなし。さるに生識者の洋行歸りは、歐洲諸國をもて、佛者の極樂淨土を見るが如くに思ひなし、何事も彼の如くせば、安樂國土、即身成佛するものとのみ妄信するは、實にうつけのきわみならずや。

いかなれば歐洲諸國さほどに賢人に乏しからぬに、なほ國々年々にかれこれと事さわがしきやと云ふに、人民と云へるもの、未だ教育を染むことの足らぬなめり。大多數の人民にして、ことごとく教育をうけたらましかは、その時こそ、安樂國土、即身成佛少しも疑を容れず成り行くなる可し。こゝを見れば國を富し、兵を强ふし、内に兄弟の墻に鬩ぐなく、外に他國の侮を防ぐこと、一凡人民にへだてなく教育をしくにますものあらじ。教育の目ざすところと云へば數少き大學者を製り出して、粧飾物となさんよりは、數多き一凡人民にへだてなく普通の智識を得さするにこそある可けれ。

同じ人にしあれど、愚なる者ほどあはれなる者こそなけれ。ひとり人々に侮らるゝのみならず、國の爲、人の爲にもならず、所謂穀潰しなど罵らるゝ者となり。幼きときは兩親に苦勞をかけ、若きときは他人に迷惑をかけ、老いては國の費え

となり、實にかゝる者ほど役なきものはあらじ、されど愚直と云へるものあり、此の人愚なれども心直く、他人の利益などなさんことを覺束なくこそあれ、又他人に害を蒙らす可くもあらず。かゝるものゝうちには、孝子順僕などありて。かへりて生識者には勝りて。人の行狀の鑑となるもの少からず、眞に愚者なりとわなみの云ん者は、强ちに物識らずとのみ云とにはあらずかし。物識りしのち更に、愚となる者世には少からず。宗教を知りて妄信者となり、朧氣に自由と云へることを知りて、過激なる壯士と化し、病理の片はしを知て危き庸醫となり。形の一つ二つ知て、武者修行に出るもの皆愚者ならずして、何ぞや。かゝる愚者の數多からむうちは、いかに立憲のよき政事を敷きいかに、衛生のよき法を說くも、馬の耳に風、蛇が蚊呑たるほども感ぜざるときは、實にいかにす可きや。故にわなみ思ふやう。今の世の急務は普く教育をしき、衛生の道を盛にするにあり、と云はゞ、そは誰人も識りつるとよ、と云るならむが、識りたる人あらば、願がふは自から先づ之を始めらる可し。

昔者京に講堂の風呂となん云へるものありけり。こゝに二人の下僕らしき者入り來けり。一人は藤五郎とて、少しく京の風に染み小ざかしき者、一人は專十郎とて、山出しとか云へる樸直者なりけり。藤五近き頃專十のうつけたるさまを識りければ、いかにもして遊ばんものと思ひ、專十に云ひけるやう、

藤　オイ專十、京の習ひヂナ、風呂に入ものは、きつと頭をはるゾ。けして腹を立つナ、腹を立つと田舍者ダと云て笑るゝゾ。痛さを堪へる所を、都人と云て賞美するのダゾ。

と云きかせおき、小風呂に入らんとするとき、藤五拳をかためて、專十が眼と鼻との間を、思ふさまにうちけり。專十はやうちけりと思ひけれど、痛さをこらえ居たり。さるにまた一つうちけり、藤五傍より知ぬ貌にて、沙汰するな〳〵となん云ひ居たる、專十思けるやう、我のみひとり打るゝと其意を得ず、こは都の習とし云へば、互ひに打ち合ものよとて、今しも足も弱げに入り來りける老人をば、待ち受けさま一つ打たり。彼の老人いたくいかりて、

老　何所のたわけダ、他人の頭をうちやガッテ、此所へ出ろ打くりかへしてやる。

となんいきまきける。そのとき專十藤五に對ひて

專　いかひ田舍者がおるナ、初心者じやナ。

　風呂たきのわが身はすゝにありはてゝ
　人の垢をばおとすものかな

小説

小公子

第四回（上）

若松しづ子

次の週間の内にセドリツクハ侯爵になる利益をます〱知始ましたが然し何事でも自分の望む通り殆ど叶へられぬとはないといふとは中〱セドリツクの心に呑込めぬ様子で、いつまでも充分には合點が行なかつたのでした。併しハ氏と段々話をする中に、差當り自分の望むとは皆叶へられるといふと丈はやう〱呑込めて來た様子で。又セドリツクの望の單純なとと其満足しての悦ひを見るとは、ハ氏ヌ取つて餘程の娯樂みでした。英國へ向けて出帆する前の一週間には色〱珍らし敷とが有り升たがある朝、ハ氏はセドリツクを同伴して彼のヂツクを訪問に下町へ出かけたと、又同日の午後には彼の門閥家なる林檎賣婆の露店先へ立つて天幕と、火鉢と肩掛と婆には莫大に思はれた金圓とを遣るといふて肝をつぶさせたと、是皆ハ氏が奇異の餘りに久敷記憶て居つたとどもでした。セドリツクは可愛らしく彼の女に事の様を説明していひ升た、

ダツテ僕はイギリスへ行つて華族になるんだもの、そうしてね、僕、雨が降る度んびにお婆さんの骨のと考へるのは嫌だもの、僕の骨なんかは子、ちつとも痛くはないのだよ、たから、僕はどんなに痛いんだか知らないけれど、僕はお婆さんが氣の毒で子、早くよくなれば好いと思ふんだよ。

さて露店のあるじは餘りのとに自分に思はぬ果報の向いて來たとは合點行ず、アツケヌとられて開た口も閉がらぬ中に兩人ははや立歸り升た。セドリツクは、

アノ林檎やのお婆さんは大變好い人ですよ。先に子僕がところげて膝をすりむいた時、たゞで林檎を呉たんですもの、それから僕は始終アノお婆さんのと覺へてゐ升よ。誰だつて深切にしてくれた人忘れられません子イ。

と云升たが、其正直、質朴なる心には人の深切を忘れるものが世には數多あるとは思ひもよりませんかつた、ヂツクとの應接も亦中〱面白いとでした。ヂツクはジエークといふ朋輩と何かいさかひをした處で、氣のなさそうな顔をして居り升たが、セドリツクが大した金子を出して後の禍を悉く追除て遣うと云のを聞ゐて、物も云へぬほど仰天し升た。フォントルロイ殿が來意を述られた様子は誠に淡泊、無造作で側に聞てゐたハ氏は殊に感服した塩梅でした。ヂツクは自分の朋友と

思ふてゐた人が、何々殿といふ位に登つて、それから命さへあれば侯爵に飛登るのだといふ話しを聞ゐて、ヂックは眼をむき、口を開いてギヨットした拍子に、帽子を落して仕まいました、それを拾ひながら妙なことを云升たが、ハ氏には不思儀に聞へ升た。併しセドリックには其意味が分つたのでした。

なんだ！かつがふたつて知つてるよ！

若侯は是を聞いて正しく避易した様子でしたが、大胆にも氣を取り直して、こふいふて説明いたし升た。

アノチ、誰だつて始めは本當じやないかと思ふんだよ。カッブスおぢさんなんかも僕が霍亂してるのかと思たんだよ。僕も始めは嫌でたまらなかつたけれど、今はモウ慣れてよくなつたんだ。今の侯爵様はチ、僕のお祖父さんで、何んでも僕がし度様にしろつて、大變深切な人で、そうして本當の侯爵なんだよ。それからハヴィシヤムさんに預けて金をたんと僕によこして呉れたんだから、ジエークの方をつける様に君に少し持つて來てやつたんだチィ。

事の結局はヂックがジエークの方を附けて、一手に客をとる様になり、其上新しい刷や非常に眼にたつ看板と服が出來たとでした。然るに彼の門閥家の林檎屋と同然で、一寸には自分の果報が眞と信じられぬ様子で、夢の中に辿つてゐる人の様に、恩人なる若侯の顔をヂット見詰めて、何時眼がさめるかと思ふてゐる塩梅でした。そうして、セドリックが暇乞をしやうとて手を出した迄は、丸で無感覺の様でした。

それならモウ失敬！。これから繁昌したまへ。僕は君と別れて行くのは嫌だけれど、僕が侯爵になつたら又た來るかも知れないよ。君と僕は親友だから手紙をよこしてくれ玉へ。これは手紙をよこす時の所書だよ。そうして僕の名はセドリック、エロルじやないよ。フォントルロイ殿といふんだよ。失敬！

と何氣なく云わふとしても聲が少し震へて、そうして例の大きい茶色の眼を妙に眼叩きさせてゐました。ヂックも眼ばたきしてゐて、瞼の邊が濕つぽい様でした。此靴磨は教育のない子でして、自分の心に感じたことを云ひ現はすことが出來ませんので、云ひ現はそうともせず、たゞ眼をパチつかせて、咽喉へ上つて來た塊物を漸くに呑込んでゐました。やがてカス〳〵した聲で、

行つちまわなけりや好いナア、

と云つてハ氏に向ひ、會釋しながら、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

旦那、どふも色々有難う。逢に連れて來て下すつて有がたう。どふも妙な子で、大變可愛くつて、ヘイ、エィ……其威勢の好い奴で、エー……エー……妙な子で、

と口籠りながら云ひ升た。そうしてセドリックの威勢の好い姿が、脊高く、武張つたハ氏に伴つて行く跡を、立たまゝポットして見てゐましたが、眼の中の曇りと咽喉の塊物はまだ去り兼ねてゐました。さて出立の其日まで、若侯は間を見てはホッブスの店へ行つて居ました。近頃ホッブスは兎角氣鬱になり勝で、セドリックが置形見の金時計と鎖を大勢で持つて來升た時などは、ろく／＼挨拶も出來ぬ位でした。其箱を自分の膝の上へ乘せたまゝで、幾度も／＼烈しく鼻をかんでゐました。セドリックは、

おぢさん、なんか書いてあるよ、箱の中に、僕が、書いてくれつて頼だんです。チィ「ホッブス氏に呈す、舊友フォントルロイより」でせう、

ホッブスは又烈しく鼻をかみました。そうしてチックの様なカス／＼した顔で、

わしは忘れやしないが、おまへも英國の貴族の中へ這入つて、わしを忘れちや困るよ。

僕、だれの中へ這入つたつておぢさんを忘れるものかね、僕はおぢさんとゐた時が一番嬉しい時だつたもの。いつかおぢさん僕に逢ひに來て下さいな。僕のお祖父さんはキット大變嬉しがり升よ。僕が行つておぢさんのと話せば、おぢさんにお出なさいつて手紙をよこすかも知れませんよ。おぢさん……おぢさんアノ僕のお祖父さんが、侯爵なの、かまやしないチィ？、アノ若しお出なさいつて云つたら、侯爵だから嫌だなんて云やしないチィ？

ホッブスは寛大らしく、

よし／＼、そうしたら逢に行ふ。

と云まして、そこで侯爵殿からドリンコート城に暫時來遊あれと鄭寧なる招待狀の來るとがあれば、ホッブスが共和主義の僻見を捨て旅仕度をするといふ條約がこゝに出來ました。

批評

○賴山陽を論ず

陜中時學第八號に、山路彌吉氏の「賴山陽論」を揭ぐ、蓋し演說の筋書なり、然れども卓落秀逸の象十分に現はれ、近來無類の好批評なり。最初、賴襄と新島襄との不思儀にも和同する點多きを叙し、新島君死後其灰未だ冷へざるに當り、賴山陽の事を連想せしめんとすとの前頭すでに凡ならず。以下、山陽在世の當時、士風の柔弱に流れたる事、政治の抑壓收斂に偏したる事、裁判制度の極て亂暴なりし事、國民の啓導者たるべき儒者が皆迂愚なりし事等を列擧して、巧に當日の時勢を追想せしめ、此昏醉惰眠の社會に立つて彼が大聲叱呼したる熱血、其著書の上に今日尚混々たる由を說き、彼を或は詩人とし、或は史家となすは、共に彼が眞本領を知らざるものと論じ、最後に彼が如此き目ざましき光焰を吐發したるは、一に其資性に因り、二に其境遇に因れりと論決す。讀過一遍、異芳の薰するとを思ふ。此筋書によりて其滿腔の所藏を十分に演述したる當日は、定し非尋常の大喝采を博し得たるとなるべし。評眼鋭利、向ふ所判然として黑白を別つ、蓋し今の文學海に一大光彩を發の價格あるもの也。吾人は今後山路彌吉と云る氏名を記臆し、其の遠からず山を出るの日を待んと欲す。

○二個の新らしき新聞

江湖新聞は、舊家の相續者なれば、素より生氣あれども、自から定まりたる家風見ゆ、但だ之と云ふ特殊に目立ちたる所ろを未だ見當るとあらず。自由新聞に至つては、書生初めて家を持てるの狀あり、帋面粗朴として亂雜あれども、活氣勃々として、前途極めて望みあり、遠からずして鬱然たる巨屋となららんか。第一號に於ては、兆民居士の文章特に靈妙あり、題して、國家の夢、個人の鐘と云ふ、筆を起して、

人は……弱點と號する無形の氣孔にて充たされたる、一言せば神と惡魔とより愛されて常々之が玩弄物となる、一種不可思儀の動物なり。

と悲痛の慨言を發ち、箇人主義自由にあらずば、眞の自由にあらざるとを妙に辨告し、先づ此一理を確定せば、此より以後、黃河万里の勢、又破竹の勢を以て、千篇筆すべし万篇論ずべしと云へり。此新聞平時定めて乾燥なるべし、時々は居士が万斛の涙を少しにても落し、能く沙面を潤ほして讀者の渴を醫やされて可なり。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

○稿本國史眼　上巻四冊

重野安繹、久米邦武、星野恒、三氏の纂著にして、帝國大學の出版に係る。三たび稿を替へて漸やく此書となれりしよしなれど、尚ほ稿本と題するに依れば、未だあき足らざるもの歟。常の本と異なりて見ゆるは、代を分つて二十一世紀となし、例せば、神人無別の世、神人有別の世、韓土服屬の世と云へる如く、夫々の時代の主なる性質に隨ひて適宜に世紀を分てるとにあり。其他は、くだ〳〵しき帝王代々の區別を畧して、めづらしき事、記臆すべき事、新らしき事などの、起元、小沿革を記し、專ぱら讀者の見易きに便す。簡約にして行文捷直なれど、心得置べき事件は悉とく備はり、毫も遜すなく、然も撰擇引據ともに宜しきを得たり。たゞ、初二章神人無別有別の二世紀は、着眼凡にして聊かも陋儒の所見に異なるとなく、方今人類學及び社會學發達の時世に立ち乍ら、尚ほ白石が古史通にだも及ぶと能はざるは、遺り惜しきとなり。故に此書は、第二世紀以下に至つて秀所現はる、所云る神代の事に至つては、むしろ初より着筆せざりし方幸いなりけん。白石云く、神は人也と、もし此段の見識をもて古史を見ずんば事歴漠々として要領を得じ。故に吾人をして若し第一世紀に名づけしめば、奪畧の時代と云はん、而して第二世紀を鎮服の時代と云ふべし。古代の眞相を暴露するは、帝室の御爲めにも我國の爲にも忠ならざるにあらず。大學に居て歴史を講ずる程のものは、少なくとも董狐の胆力なかる可からず。

○精神的基督教

木村駿吉氏が編著にして、第二回夏季學校講師の講話演説を受錄撰擇したるものより成る。第二回夏季學校は、押川方義君が校長となりたると、委員諸君が情實習慣を勇脱したるとの故を以て、講師生徒ともに斬新意見の交通を爲し、基督教學海に活潑々の一生面を開き其勢力を團結して公衆の眼前に明らかに識認せしめたり。此書は即はち當日講場に於けるの筆記にして永く當日の光景を寫し留むるものと云ふべし、其日不幸にして、來會せざりける四風遠方の學生もし一讀せば益する所ろ甚大ならん。押川君の歡迎の辭は、確信の要を説きて、眞辨今尚ほ潑溂たる心地し、讀むものをして思はず奮起せしむ。中島力造氏の科學と有神論、大西祝氏の希臘道德移于基督教道德之顛末の二篇は、極めて明晰なり。又押川君の歐米漫遊の話は、愛國の志士を益すると夥たゞしく、惰夫も決起して大に猛進せんとするの感あらしむ。

一家評

○末松謙澄氏の演説

雲峯子

之を西洋諸國の文學に比すれば我國の文學は幼稚未熟なる事實を待たず、苟くも文學に志すもの何人か其幼稚未熟なるを慨せざらん、亦何人か其發達進開を望まざらん、吾人は末松謙澄氏が我國文學に關する演説ありといふを新聞紙上に見たり。其希望甚だ大なり。我國の開化史、戰爭の歷史、英雄豪傑、大家名人の、傳記、宗教史、封建時代の情態、古來の町村制度の事等より文學歷史、小説史、演劇脚本、唄等の事に至るまで悉く今後著述をなし得るの開墾地ありて云はれけり、氏の述べられし所は氏の希望に出でず、只夫れ希望なり、故に氏の文學上の意見として見るべきもの非ず、希望を述べたりとて必らずしも是に應ずるもの著作者出づと云ふべからず、されど世人をして我國文學の尙低度にあるを悟らしむるに於ては多少裨益する所なくんばあらず。

○結末の一語

世人稍もすれば文學は薄弱男子の玩弄物なるが如く誤想す、是未だ文學の眞價を知らざるもの、豈共に云ふに足らんや、吾人は末松氏演説の結語(新聞に記せし所にて)の其貴きを知る、曰く。

文學といふものが政治上に關係して、ドレだけの關係があるかと云ふに政治家に於て文學上のもてあそびをしない者は、自分が其執る事柄を止めた時分に、甚だ物寂しく感ずるといふ事が西洋の書に書ひてありますが、ソレ故西洋政治家には文學を嗜む者が多くある、ビーコンスフヰールドは長い小説を書き、グラッドストーンはエッセイを書く、故に政治上に於て働くものも、文學の嗜みを持たなければなりません(下畧)

と、吾人は先きに某氏が政治家亦文學の事を知るを要するの一文を見、今亦末松氏の此言を聞く、吾人は諸氏に尾して世人が一層文學の事に心を傾けんを希ふ。

○國文の不躰裁

若夫れ西洋各國の文典を引照し來らば、我國文の不躰裁なる明々暸々たらん、否西洋文典を借るを要せず、我國古來の文典を參考するも尙今日の文章、錯誤雜駁を極むるを知らん、されど此事を今日文章家の過ちに歸するは甚し酷なり、我國古來文典といふべきものありしには相違なし、然れども思ふに甚だ不完全にして西洋の文典に比すべからざるものありしならん、加ふるに漢學の傳播によつて國語の發達を妨げし故遂に文典のみならず、古代の國語をも捨て、顧みざるに至れり、されば文學發達の大勢を見るに其今日ある自然の成り行きにして深く咎むべからず、とは云へ吾人は今日のまゝにて滿足すべしと云はず、吾落合氏に和して大聲疾呼し、世人をして一日も早く文法を修むるの必要を說く者あり。

○落合直文氏の演説

吾人嘗て落合氏が文法に關して演説せし所を聞けり、其云ふ所擢拔人を驚かしむるといふにあらねど、今日迄世上幾多の文人學士が等閑視せる所を列擧し得て盡せりと云ふべし、其大意を擧ぐれば漢書に句讀を附せしを大ひに文法を誤りし以來我國の文章漸く亂れ、今日に於ては過去、現在、未來の分ちなく、自他の區別なく、亦假名の用法誤れる事多し、國文といふもの必らずしも和文ならず、漢文ならず、一般人民の思想を發表し得るものあれば如何なるものにても可なり、されど我國には古來厳然たる文法あり、世人が之に從はん事を望む云々と、此に關して氏が起草せし文章他日世に公にせらると聞けり、世人が之に注意せられん事を猿め勸告す。

○めぐみ　第一號

關西五の女學校協和して「つぼみ」と云へる雜誌久しく世に出で居るところ、此度亦た神戸英和女學校より「めぐみ」と云へるもの現はれぬ、編輯員安藤たれ子の歌に

みめぐみの露なかりせは此文の林も何如で斯や繁らん

蓋し此の意味にて題としたるなるべし。校長ブラウン女史の序文に、此は宇宙を改革し、内閣を顚覆し、喧ましき女子教育の論などに口を容れんが爲に非ずたゞ女生徒の文思文想を煥發せしめんが爲め也、而して此を出さんとせしに及びて既に莫大の効あり、此后またいよ〳〵益あらんとなと、吾人も亦た同じき心を以て迎へ且つ望む。

○筆海

第一號、府下北豐島郡南千住町豐水社より發行す俳諧狂歌など多し。又法律の議論も多し。

○狹中時事

第八號より大に改良したり、論説欄内に、山路彌吉氏の筆に成る演説の骨、論頴山陽の一篇あり、特に秀づるとを覺ゆ、別項に畧評する所の如し、其他藻塩の烟、小説、時事等、皆な面白し、地方百十の雜誌中、一種出色の旗幟あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

○太夫人實成院行狀。

左は松陰先生實兄の起草に係るものにて前號に掲げたる松陰先生母堂の精傳なり、通信者が寄贈により全文を載するを得。

太夫人名は瀧子文化四年丁卯正月廿四日萩城に生る實は毛利志摩家臣村田右中の女にして兒玉太兵衛に養はれ文政九年丙戌十二月杉氏に嫁す三男四女長民治家を嗣く次寅次郎出て、吉田氏を嗣き芳子兒玉氏に壽子小田村氏に適き艶子夭し美和子久坂氏に歸き（後楫取氏に嫁す）季敏三郎唖、死す太夫人性仁愛、勤儉克く事に耐ふ初め杉氏家貧、廬を城東護國山の南麓に結ひ耕讀を業とす太夫人先君に從て野に耕し山に樵り時の寒熱身の勞逸を顧みるに遑あらす備さに稼穡の艱難を嘗め或は自ら馬を牧するに至る後先君出仕、外に在ること六年餘而して素より婢僕を役する能はす太夫人代りて家事を理め田圃を耕す其勤勞知る可し太夫人の入りて婦となる舅に見ゆるに及はす姑に事へて至孝なり姑の妹岸田氏亦た貧杉氏に寄食する年あり且つ久しく病んて床に臥す時に民治猶は五六歳寅次郎三四歳にして芳子は僅かに一二才のみ太夫人三子女を携へ扶持看護到らさるなく遂に其汚穢を洗滌するも以て意とせす姑氏泣て之を謝し觀る者爲めに涙を垂る院之に處り終始渝はらす一に晏如たり太夫人貧困の中に在て最も心を子女の教育に用ひ諄々訓誨、家事を以て學業を缺かしめす先君の弟玉木正　君人と爲り峻嚴輙く人を許さす乃ち稱して丈夫の及ふ能はさる所となす後寅次郎松下村塾を繼くに及ひ來學の子弟を愛し時に賞するに物を以てす當時國論紛擾寅次郎讒を蒙り家に幽す同志の士來り訪ふ毎に太夫人喜んて之を迎へ酒饌を饗して款待す其閉居後進を誘掖するを得るもの太夫人實に與りて力ありとす太夫人頻りに逆憂に罹り四子四孫其他指を屈するに堪へす就中寅次郎の刑死は變の大なる者にして禍延ひて先君に及ひしも絕て狼狽恐怖の躰なく言容常に異ならす明治九年前原の亂あるや其最愛の孫小太郎一族の長老正韞君及ひ孫婿玉木正誼皆な之に死し族人亦た多く事に與る故に鄰里變を聞くも禍を恐れて近かす而して民治は役に玖珂郡に在り家は唯た婦女孩童のみ太夫人毅然敢て哀を發せす單身事を處し一も誤らす其胸中餘地ある槪ね此類なり太夫人晩年名聲益世に顯はれ朝野の慰問絕へす遙に書を寄せ眞像を請ふもの多し明治十五年冬下野の人藤田一郎來り就き太夫人を見る去るに臨んて亦た寫眞を求む其東京に到るや持して三條相公に謁し遂に　乙夜の覽に達するを得　皇太后　皇后兩陛下亦た御覽を辱ふし十六年八月十六日特に羽二重一匹を賜はる廿年十一月病作り稍重し遠江の人金原明善嘗て寅次郎を慕ふの餘太夫人の爲めに謀るもの少なからす此に於て報を得て大に驚き土方宮内大臣に至り狀を具す既にして事聞す此月十八日　皇后陛下御菓子一折を賜ふ幾もなくして病愈ゆ後二十二年十二月二十七日又た縮緬一匹を下賜せらる本年六月廿三日有栖川大將殿下山口縣御巡視に際し松下村塾を御通覽在らせられ親しく太夫人を慰問せらる（廿年十一月舊藩主毛利公夫人紋付羽織を贈りて其病を問はれ十一年公の萩に來らるゝに當り東當光寺に於て謁見せし時夫人親しく物を授けらるゝ等亦た常人の得難き所なり）又た松陰神社創建の時　思召を以て金を賜ひ後寅次郎に位を贈らるゝ等（此時金原氏金廿五圓を寄せて之れを祝せり）優渥の恩典に逢ふ毎に　皇恩に感激し泣涕已ます必す先君及寅次郎の靈を祭り且つ曰く兒非命に斃れ先人踵て世を去り具に明時に遭ふを得す老婦獨り此榮を荷ふ何そ悲痛に堪んと易簀に先つ十三日松下村塾修繕畧成り上棟式を行ふ太夫人輿に乘し出てゝ之を見る式罷み宴を張るに及んて終始筵に列し杯を賓客以下職工に傳へ喜色溢れて掬す可し蓋し太夫人久しく寅次郎の不幸を憐む而して今は則ち位を贈られ社を建て又た塾址を修むるに至る其老懷を慰むる知る可きなり太夫人先君を喪するの後深く佛を信し島地大洲赤松諸師に就て奥義を質し又嘗て大谷法主に謁し訪字を受く念佛唱名を以て養老の樂事となし病革に至るも猶ほ口に念佛を絶たす常に曰く生きて朝恩に浴し死して樂土に遊ふ人生の幸福之に過きすと太夫人飽くまて憂苦を閲歷し身心を勞する尋常に非す然れとも老に至て精神未た弛はす兩三年始て稍や衰耄を覺へ且つ四肢日に肥大を加へ起居意の如ならさるを以て常に蓐を離れすと雖も頗る健康にして餐を加ふる壯者に減せす八月廿三日偶流行感冒症に罹り廿九日午前十二時終に逝く而して前夕猶能く紅餅數片を喫し詰旦又た饗粥一椀を啜るを得枕に凭り安臥睡に就くものゝ如くにして絕し毫も苦悶の狀を見す翌三十日護國山南舊廬の上先塋の次に葬み浮屠謚して實成院釋知覺乘蓮大姉と曰ふ乘蓮の字は則ち法主嘗て與ふる所なり既に沒するの七日　皇后陛下　思召を以て金一百圓を賜ひ追吊の恩旨を傳へさせらる民治恐懼捧持して靈前に供す嗚呼太夫人にして知るあらは其恩に感し榮を喜ふ果して如何そや而して今は則ち得て見す唯た音容の眉睫の間に彷彿するあるのみ乃ち涙を收めて行事を狀し以て家に傳へ匹婦にして數々九重の恩命を拜する太夫の如きあるを知らしめ併せて　皇恩の忘る可らさる太夫人の崇ふ可き所以を示す太夫人世を捐つるの三十日不肖民治泣血手記

恩命傳達の書翰一二を付記す

前文節畧御老母樣御事先達以來御病氣の趣　皇后宮被聞召格別の　思召を以御菓子一折下賜候段小官へ御沙汰に付即差贈候間御頂戴の上小官迄御禮の御一書差越相成度候云々

明治廿年十一月十八日　杉孫七郎

今朝十一時參内仕候處　皇后陛下より御側近く召させられ松陰の老母へ些少の品なれとも遣はし度候間彌二郎より可然取計ひ呉れとの御言葉ありし故此包（白縮緬一匹）拜戴し如斯迄　大御心を掛させられ松陰の母は申迄もなく松陰も地下にて感泣致し候半と申上け落涙よて御前を退きたり彌二か心事御推察可被下候右御品御送附方は廉三樣へ談し取計ひ可申候何卒先師の御靈前にて北堂君へ御渡しあらんとを奉希望候香川大夫の言には當三月松陰並御老母の事　皇后陛下に御話相成候後（御料局長官拜命の時松陰先師在世中の事色々申上たる事あり）幾度も御老母の事御話に相成よき折もあらは何か老人に遣はし度と御内沙汰有之過日來品川が參内したれは知らせよとの御事に付先刻申上候處直に御召に相成候云々との事也實に先師の顏色彌二が眼にちらつき先師の靈魂は　皇城を擁護して居る心地致し　御前にて落淚に沈み漸前條記載の御禮丈け申上けたり御推察奉願候早々拜白

明治廿二年十二月廿七日御料局にて　品川彌二郎

交詢

みれ子

●住吉松子氏　さうさかれのかれ再考せよとの仰、難有奉存候、されどかの字はくあれの二音より成るもの故さうさくあれと云ふに同じと存じ候、即ち單に貫くい、あると稱讚せる語に外ならねど上をこんと申候故れと結びし事に御座候、何故に御咎めを蒙りしや相分らず、竊かに不文を耻ぢ申候、再示精教を給はゞ幸ひに候、御住所を存じ不申、みれ子姉に托して交詢欄に御答へ申候(雲峯生敬白)。

●西京禮儀生　日本人が西洋服を用ひるにつきては欠禮の事往々にしてあります、オーバコートの用法につきての御問ひ、私は西洋の禮式とて存じませんが西洋の問に交りて見ますするに會堂にて說教する時、教場にて生徒を教ふる時、人の家を訪問する時抔は通常脫ぐのが禮式の樣です、而し寒さに堪へ艱き事もあらば一應其坐の人々に御免下さいと云つて着るのは宜しい樣です。

●山梨縣一靑年　成る程近來作文書の發行にあるもの多くあります、而し私の見る所では皆高尙のものにて迚も小學校生徒には適しない事と思ひます、近來發兌になるは多くは古來の大家の文を集めたものです、小學生徒には矢張り從前の通り記事論說文例とか高等小學作文と云ふ趣より外に適當のものはなかろうかと考へます。

●藤原氏　獨立學校と申すは、府下角筈村にあります、何人にも入校できましよふ入學試驗合格なれば〇小說靑年進路後篇はまだ出版にならぬよしです〇勉强するには塾生通學生なれば身躰の爲になるか、是は塾舍の有樣から食物、運動の便不便等を見ふければ答へられません、亦通學生と申しても如何なる所に居て如何程の路程ある所に通學するものにや之を思知らぬ内は通學の可否も申上られません〇如何なる文章家の文が宜しきや是は人々の好みが違ひますから此處で申上られません、自味ふて見て其好きものを手本とするしか外のよき方法はありますまい。

●土佐悲憤孃　仰の如く婦人に國會を傍聽させぬといふ事は實に不條理至極な事です是に就き本年の國會に於て此規則を改正するや否やとの御尋ね是はちと只今斷言は致し兼升然し代議員中にも公平なる人澤山あり女權論者もある事なれば多分熱心なる削除說出る事であり升う到底非理は道理に勝てぬものなれば必早晩改めらるゝに違ひありません只其規則を改むる日の早きと晩きとは義人の働らきの大小と議員方の働き方とにあるのです願くは貴孃等も其地方に在りて相等の働らきをなし玉へ。

●在京の一女生　御尋の寢狀の惡ひのには足を縛りて寐ては如何と仰せらるれど是は實に姑息な法です是から段々寒くなり升から自然夏季の樣に不しだらな寢ようもなさらぬ樣になり升うが心にかけて寢るのが第一です寢しなに行儀能く寢ようと確と決心してお休みなされば自然枕を外したり蒲團の外へ飛出す樣な不始末は仕出さぬようになり升足などを縛つて寢ては夜中何事か起つた時起上るに甚不都合です平常でさへ足を縛つて寢た事を忘れ急に淨水になど行んとて起上る時誤て轉ふ事は往々あり升實は私も種々失策の末心にかけて寢るが第一といふ事を實驗上悟り升たから斯く答申升。

時事

○元老院留別

謹しみて元老院の行くを送る、願わくは復第二元老院のあること勿れ、日本は尙は少年國として改革せざる可らず、未だ優々元老を安樂せしむるの時機にあらざる也。

○男女俳優の所作事

男女混合の演劇既に行はるゝこととなりたる今日は、最早や時事翁此頃の說法の外ある可らず、云く、從來我國芝居座にて男女纏綿の情を果すに隨分極端に走るの弊なきに非ざりしかども其女形たるものは眞實女性に非ずして男子が女子に扮したるものなりと思へばこそ其所作の或は感情を冒すとあるも其俳優の性質を知りて之を看過したることならんなれども今ま男女混合して男子は男子、女子は女子、本來異性のものとあれば其所作事の何如に因り見物人の感情に刺激を與ふるの場合の如きも從來の男性演劇に比して一層甚だしかるべし、男女混合芝居を興行せんとするものは充分此邊の事情を心得東西人情の相違等をも勘辨して弊を社會に得ざるやう豫かじめ其用意を密にするは最も肝要の事なり。

○主義の人主義の筆

板垣伯、信州松本に於ける演說に、天下の諸新聞を見れば何れも皆な營利的商業的の効用のみにして主義を發揚し主義を守衛するの用に供するもの一もあることなし。

○芋と自由

又同時の演說に、君が自由論に發念したる當初の經歷を述べたり。此は昔しより孔孟の敎にありて所謂る衆と共にするの義に外ならず、儒者皆朝夕のやうに暗誦したることなれど、其活意義を當年戰亂の間に發揮したるは、君が卓所と云ふべし。君が此事甚はだ有名にして人多く承知すと云へど、君自身の公開演說に於て之を承わるは今を始めと爲す、讀者須からく紀念さすべし。

○會津女學校

前號に記載したる同地女學校設立の事いよ〳〵着手せらる、其發起に尤とも熱心なる海老名りん女史は、來月三日芝能樂堂に能舞を催ふし、入場金の殘餘を同校創業費に獻寄せんとて、目下只管ら盡力中のよし。

○新潟女學校

大坂に梅花女學校を創じめたる成瀨仁藏氏は、新潟に其英和女學校を創立したる人なり、共に是れ日本的基督教派の獨立女學校にして、府下に於ける明治女學校と主旨を一にす、吾人が特に贊成を表して、就中其の隆盛に趣かんことを祈り居りたる所のものなり。然るに成瀨君近日、女子教育上及び慈善事業上の視察の爲め米國に渡行せんとするに付、新潟女學校今后何如かあるべきかと密かに深憂し居たるに、澁谷寓作君代つて校長となり、南摩まき女史(綱紀氏二女)教頭となり、いよ〳〵校務を擴張せらるゝこととなれりと云へり、北越女學の爲め、大に賀すべき也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○三政黨に勸告す

有志婦人を代表し、矢島かぢ、德富ひさ、淺井さく、佐々城豐壽、荻野ぎん、清水とよ、湯淺はつ、其他幾十名の夫人は衆議院に於ける婦人傍聽禁止の規則案に關し、立憲自由黨、改進黨、大成會、等の事務所へ向け、意見書を寄送したり、文の結末に、

あはれ狹の胸を察し雄々しきますら男の義心振り起し玉ひて此の痛める もの等の爲に同情を賜はらんとを祈るとあり。

○剛柔の顚倒

教育報知に云く、

剛氣なる男子反つて優柔なる和歌和文に身をいれ、優柔なる女子反つて剛氣なる薙刀馬術に力を込む流行の變遷宛がら萍の所定めず流るゝが如し。

幾分か眞理の言なり、不思議と云ふの外なし。

○詩經中の淫詩

清國蘇州の知府は淫詞小説の風俗を敗壞するの害を憂へて曩に之を嚴禁せし處頃日元和布衣某ある者書を知府に上つりて詩經中の淫詩をも删りて新たに削定し以て學塾の課本に爲さんと經を引き典を擧げ數千言を費やし稟請せしが知府は之を斥けたり其言の大意に曰く稟辭を察閱するに一に淫を防ぎ正に導くを以て心と爲す其志誠に嘉すべし惟是れ詩三百編は懲あり勸あり倶に聖人の手を經て定む程朱の大儒と雖も猶未だ輕議せず吾子何人ぞ敢て此僭妄の大告を踏む請ふ所准さず云々。

○文學上の交際家

日本の文學者には專門家多し、然れども交際家と云ふべきもの少なし。玆の交際とは世俗に言ふ交際の意味にあらず、文學に對する交際の意味にして即はち諸種の文學と一と通りの文明的交際を爲すの謂なり。曩には福地櫻痴君文學上の交際家たりき、今は末松靑萍君其あとを續がんとす。近頃の君が文學上の演説を見て知るべし。

○京都に於る女學校

●京都府立高等女學校　府立とはいへ近來全く地方税の支出を仰がず本願寺より年々二千圓宛の補助を得る外は一切其經濟を本校にて持切り居るといふ生徒の數は目下四百有餘名内百五十名は全校内に寄宿せり教場の數十有二寄宿舍は二階建の一棟にて上下通じて六十四室あり主に普通女學科を授け和服裁縫幷に洋服裁縫專門は別科として置かれたり隨意科には絃歌和歌挿花及茶の湯の四科あり西洋料理法も生徒の志願に依り一週一回宛實地に就て教授さるゝ由にて夫れが爲に食室及割烹所の設けありて要用の器具を備付たり校舍の搆造といひ器具の完備といひ關西地方には多く得難き學校なり人若し擧動に於て殊に温和に藝術に秀でんとを思はゞ是に上越す學校はなかるべし修身談は每月一回位あり修身科の標準は日本在來の道德に幾分か歐羅巴の道德を調和したるものなりとぞ

正誤

左の通申越ありしに付本誌第二百三十二號時事欄内學習院と題する記事は取消す

拜啓、貴社女學雜誌前々號の紙上に、大坂婦人學習會の運命と題する一項は、思ふに公會月報より轉載せられたるものならんと想像仕候、然るに該文中年々四百圓宛、米國傳道會社より補助を受けし云々、又一ヶ年間繼續せしめ云々は全く事實相違し、同會は未だ嘗て外國傳道會社の補助を受けしにとなく、又今後嘗に一年間のみならで、益々校運の隆榮を圖り、愈々規摸を擴張し、竟に完全ある一大女學校たらんことを期する由に候、就ては公會月報には其第三號に於て、誤聞と題し取消仕候間、何卒女學雜誌にも、此全文を掲げて、該一項抹殺なし下され度候也

大坂土佐堀町五丁目
大塚惟明

女學雜誌社御中

片々

ふみ子編

●女王の結婚　久邇宮親王殿下の第二王女阿喜子女王（明治三年四月生）は今度侯爵池田銈政氏と結婚せらるゝ事になり近日輿入の都合なるよし

●松山婦人慈善會　同會は今度虎列剌に罹りて避病院に入りたる兵士及び多くの該病者の爲めに看護婦二名を差出さんとて同會長山口壽惠子より縣知事勝間田稔氏へ宛て其願書を差出したりといふ

●金城女學校　名古屋市下堅杉町なる金城女學校は職員及び委員の熱心と盡力によりて生徒の數も追々增加せしが今般更に女教師を增聘し教育上に改良を加ふる由

●禁酒上の働き　福岡市博多に於て去る頃禁酒演説會を催したりしが演題は、禁酒と經濟、（江浪龜四郎）酒は不幸を生むの母なり、（大村マスヲ女）嗜好の迷（古賀鶴次郎氏）等にて演說終りて後酒毒に付ての幻燈なども使用せしが來員中禁酒の必要を感ぜし者もあつて目下隨分禁酒會組織の見込ありと

●産婆試驗　本年第一期産婆試驗は來る廿七、八日頃より施行する事に定まりし由受驗者は本免狀八十餘名假免狀三十二三名なりといふ

●繪畫展覽會　上野公園内櫻ヶ岡なる日本美術協會には今廿一日より向卅日間繪畫展覽會を開く由

●横濱に於ける廢娼論の勢力　横濱靑年會々員は昨今頻りに廢娼の運動をなし去十六日の總會に於ては同會より帝國議會及び來月開會する神奈川縣會に廢娼建白書奉呈の件を可決し會員三百餘名は目下何れも奔走中にて數日の内に淺田知事へ宛て差出す建白書の如きは同縣下の衆議院議員を初め二十餘名の同縣會議員皆贊成調印し署名者の數は實に六百餘人に及べりと云へば來月の同縣會に於ては必ず目覺しき一問題となるべしと讀賣新聞は報ぜり

●印度は女醫多し　印度には婦女子の醫術を修むるもの甚だ多く既に諸醫學校にて醫事を學び居れる年若き婦人のみにても其數は二百名程もありとなり

●芝公園の幼稚園　芝公園第六十五號の幼稚園は今度更に遊戲開語等の諸室を增設したるを以て當秋期には新に幼稚生を募集せらるゝよし全園現在の教職員は園長長田フサ牧野カ子由良ケイ河合リヤウ上原トク等の諸氏にて其監督の任に當るものは外山正一神田乃武元良勇次郎等の三氏なるよし

●靜岡通信

●靜岡女學生の服裝　靜岡縣尋常師範學校女子部及び附屬小學校女生徒の服裝は襠なしの袴(俗に行燈袴といふ)を穿ち頭は皆な束髮にして足に靴を穿てり其躰格はよろしく其品行は方正なり

●寄宿舍　師範學校女子部の寄宿舍は學校の位置を距ること十町內外の地にあり一の搆をなし町家を離れ喧噪ならずして女子の勉强には至極適當せり寄宿舍の監督は加藤米子松山鎰子二氏なり

●講談　每月一回土曜の晩に寄宿舍にて講談會あり師範學校の職員有益の講談をなす

●女子部卒業生の同窓會　今年七月女子部卒業生のもの縣下各郡に散任せしを以て來る十一月三日靜岡に於て同窓會を開き舊情を溫め各任地の摸樣を語り淸く樂しく集會をなすやに聽く其幹旋は重に靜岡在住の卒業生負擔する由

●女教員　目下靜岡の高等小學校には三名の女子師範科卒業生あり尋常小學校には二名の卒業生あり教授に盡力せり

●婦人會　昨年井上れつ子其他有志の婦人相謀りて組織したる婦人會は本年に至りて出席者追々少なくなり殆んど休會の姿に立到りたるは惜むべし

●一般婦人の內職　靜岡中以下婦人の內職は每年四五月の交より七八月までは茶摘み製絲ヒロヒの業をなす冬に至れば菅笠を編み竹細工をなし少しく下ればマッチの箱張りをなすもの多し又店頭に水菓子駄菓子燒芋等を賣るものあり

●茨城縣通信

●來る廿六日近衞兵秋季演習天覽として　天皇陛下　皇后陛下には行幸啓あらせらるゝ旨にて行在所を水戶市水戶城內茨城縣尋常師範學校に御內定ありたり依て學校は臨時休業し師範校生徒は十月十五日より外宿を命ずる旨論達されたる由。右に付き縣廳にては事務所を設け夫れ〳〵掛りの人を定めて準備に着手せり。東茨城郡にては全郡一致して奉迎敬意を表せん爲め東茨城郡役所に於て村長會議を開き協議を遂げたり。東茨城高等小學校女生徒には一切束髮を禁じ必ず日本髷(イチヨウがへし)の類に結び菊花の簪を挿み衣裳は成る丈精良なるものを着し白の半襟をかけ靴を禁じ必ず一重の麻裏草履を穿ち奉迎すべき旨教員より內諭されたる由其菊花の簪白の半襟等は各生徒より學校に金を出だし購求し貰ふ由なり又師範學校附屬小學校にても女生徒は袴羽織靴束髮等は相成らざる旨內諭されたる由

廢娼記事

去十七日京橋新肴町開化亭に開きたる、廢娼壯年義會、東京廢娼會、婦人矯風會、婦人白標倶樂部、東京禁酒會の六團躰發起に成れる、廢娼主義有志者の大懇親會には、來會者全亭に充ちたり、最初矯風會長平岩恒保氏を議長に推擧し、平野善太郎氏の發案（各團躰より二名以上の委員を撰擧し之に廢娼運動の要務を托する事)、次に小島官吾氏の發案（各政黨團躰に對し政務調査の中に廢娼事項を組入るゝ事勸告の件)、最后に根本正氏の發案（帝國議會へ廢娼建白入呈の爲め委員撰擧の件)、三つ乍ら滿場總一致にて可決し、后ち薩摩琵琶の余興あり、六時前皆な快然分袖して去れり。同日の計算左の如し、

三圓九十七錢	會員費七錢づゝ合計	一圓五十八錢五厘　東京廢娼會寄附
一圓	廢娼壯年義會寄附	計　六圓六十五錢　右一切費用

●神奈川縣　（其四）

佐々木笑受郞

是より先き小田原町に在るの時覆盆の大雨連日に及び戶外三寸亦出づべからず空しく客舍の四壁となり四十八有時を費しぬ明旦天尙ほ曇鞋を穿ち發足す雨を氣遣ふて天を仰ぐ數十回前面遙かに見る銀蛇平野の間に蜿々たるを數千の人は之を捕殺せんとてか或は鄉槌を高く擧ぐるあり或は太き綱を引く者あり衆に徒手なし之れは是れ酒匂河滿水堤防破壞を防ぐ農民の有樣なり而して國家の基本を毀損する物獨り此洪水に止まらんや笑受郞か渡らんと用意し來りし橋梁は既に落ちて今は大平洋中泛々たる浮木となれりと然れとも田舍の質樸なる農民は親切に上流尙ほ橋あるを敎へ呉れたり親切は斯くの如き手にば宿るまじと疑はるゝ筋骨飽くまで太き指もて指す方角に進み行く一里斗り其地に到れは豈に又圖らんや激流渦を爲すの處只橋柱尺餘を辛ふじて水面に見すのみならんとは、宿るに家なく乘るに車馬なければ山又山と流に沿ふて徒歩すること又一里半餘駿河の國に程遠からぬ都夫頁野の邊に出て、漸く殘る小橋を渡り流れの他岸を下りて

●大住郡

に出てぬア、此自然の變躰は實た笑受郞の前途幾多激水奔流の之れを妨ぐるあるべく峻峰嶮路の之れを苦むるあるべきを覺悟せしめて大なる奬勵者なりき同郡議員は宮田寅治佐藤政吉及び前田久治の三氏なり內前二氏は基督信徒にして宮田氏は實に昨年度神奈川縣會に廢娼論を發議せし人なり其折不幸にして時機尙ほ早しとし否决され氏は益々不撓不屈の精神を鼓舞し素志の貫徹せん限りは每年度之れを提出せん傍ら大に縣下の輿論に訴へんと計畫するの時なれば我靑年會の運動を大に贊成せられ笑受郞か氏を訪問せし時は已に佐藤氏と共に贊成者を募集し各土地の有力者中廿有餘名の調印を得てありしにぞ笑受郞は雀躍手の舞足の踏む處を辨せざる程に喜びたり而して前田氏も又大に贊成反意なく調印せられたれは大住全郡の議員凡て同意同感の憂士なり。

週報

官令　十月廿日勅令第二百五十五號を以て元老院を廢止せらる●廿日海軍に關する勅令二十件を公布せらる

政治　十九日江東中村樓に星亨氏歸期の祝宴を開く●廿日彌生倶樂部總會を開く

教育　和佛法律學校は去る十七日芝紅葉舘に於て本邦典定結の祝宴を兼れ秋季慰勞會を催せり●十九日神田錦町錦城學校に於て靑年文學會の發會式を擧行したり

雜報　廿日自由新聞第一號發刊●十五日文則第一號發刊●正四位勳三等男爵岩倉具經氏は去る十七日卒去せり

海外通信　（其二）

在米國通信員　稻澤かほる

●陛下肖像　英都ロンドン府の侯爵夫人ルーイスは當時女皇陛下の春齡の御肖像を調製中の由右は女皇陛下の稚けなき時ケンシントン府に生ひ育ち玉へる折の紀念として同府に下賜あらせらるゝ思召の由に伺ひ侍べる。

●女畫工　英都ロンドン府の彩色畫師ミス、チヤロット、ロビンソン孃は女皇陛下の思召によりて一揃への幅紗に彩畫し又ウエールスの宮の御息所の需めに應じて山水の一幅を畫くの幸遇を得て爲にロビンソン孃の畫と云へば當時英都に大流行となり孃の揮毫を乞ひ來る者門前市をなし畫工料は何程にても孃の云はるゝが儘にて孃は之が爲に僅少の勞をとりて多額の富を得つゝ在る由なり。

●ワレース夫人　英國のサア、リチヤード、ワレースの死に就て氏が多年の間に集聚されし美術品は其價値に就て大に世間の注目を惹起せり。ニユーヨークサンの通信によれば、サア、リチヤード氏は是といふ心服の友なければ氏の元よりの企望はハルトフホードの舘を讓りて其目錄を國民への恩賜となすにあるべし。其目錄の價値は見積にても三百万ポンドより五百万ポンドの間なるよし。今此等巨額の家財は同氏の死後數週間未だ英國民の掌中に落ちずと雖も恐らくは之を得るの機遠からざるならん、其后遺書を取調べられしに單に一片紙面に遺産は悉皆最愛の妻君に托す由を記せり、さすがに氏に愛待されしワレース夫人なればなき良人の生前の企圖に從はるゝや必せりとすれば遂に此ハルトフホールドの舘は英國民が掌中の玉となるべし。

●女后ユージン　今なほ威風ありて温雅なる女君に在まして其肩のあたりのみすがた、頭の平均尙も昔に變はらせ玉ふことなく最と美婉に在はす由、女后の眉毛には瑠璃を帶させ玉へど、御頭髮は白雪も紛ふばかりなる由。

●ジエン、インゲロー　英國の文學社會に名譽の地位を占められしジエン、インゲロー孃は此頃孀の慈母を伴ひてケンシントン府に隱れ住ゐさるゝ由、孃は今年五十五歳の齡を重ねらるれど未だ曾て人に嫁せず且亦孃は僅かの外は餘り書を著はされし事もなく只孃の時と、入り來る金錢は己れが關する教會內の貧者の爲に慈善事業を成就するのみに費さるゝ由なり。

●英國のドルセー、テナント、スタンレー夫人　巨額の結納品を受られし一話……近世の英雄なるスタンレー氏は自家の著書によりて貳万「ポウンド」受了されしを象牙製の金子箱に封入して之を氏の妻君たるスタンレー夫人の玉飾料として贈られし由。

●露のプリンセス、チヤンスキー女公の變　ニユーヨーク府より八月二十八日の特報に：此日附より二週間前より獨逸ベルリン府よりの電報によれば露國の國境なるシベリヤの地へ護送せる多數の流刑人中コーサック兵等の暴戻なる老幼者婦人病者抔を取扱ふことの餘りに苛酷なりければ之を緩かにせんとを訴へしに聞入ざりければ各々自由を得ん爲に双方の間に鬪爭起り彼は十分なる兵器あるが上に身体屈强の兵なり吾等は素手未熟者なり加之多勢に無勢瞬たく間に多數の人々虐殺されけり中に就て露の皇族にて最も美婉の聞へ高く渡らせらるゝプリンセス、マダム、チギンスキー女公は齡僅かに十八歳の春期に在ましけるが無慘や！不幸や！右の騷ぎの眞最中に銃丸にて御頭を打ぬかれ玉ひてあへなくも其處に非命の死を遂げ玉ひぬ、嗚呼々々何故チギンスキー女公はいとおしき身にておはしながら斯く國事犯者と共に捕はれ玉ひしやと尋ぬるに近頃渡米せられし或るクイアトコスキとなんいへる露國の紳士の物語りにプリンス、アダム、チギンスキー公より承りし直話には多分同女公は露國の政治改革黨の一派に加はり玉ひしことゝやあらん其故なりとの事に聞へ侍べる。

豐前小倉通信

風俗　當地は長州馬關と相待て西海屈指の名邑なりと雖も風俗概ね遊惰放逸にして生産事業に精勵せず且好んで美食す故に富商豪農甚だ少なし。

宗教　佛教信徒殊に眞宗派の頑信者甚だ多し牧師留川一路氏熱心誠意主の道を布くに汲々たりと雖も未だ大なる効果を見ず每日曜日教會に集まるもの十名以上に上るは稀なる有樣なり少しく意を風教上に注ぐものは皆慨歎せざるものなし敢て請ふ主にある滿天下の兄姉幸に君等が朝祈夜禱の舌端を以て此閉鼎裡に棲息する憐れなる兄弟姉妹の爲めに一臂の熱禱を添へられんとを。

女學　未だ女學の必要を認むるの機運に至らず女學校と呼ぶ程の學校なく從て女學生と云ふ程の學生なし唯高等小學校若くは裁縫學校に通學する僅少の女生あるのみ而して此等の女生は何れも温柔にして女子の態度を損せざるものゝ如し。

廢娼　一時廢娼論の盛んなりし頃は當地にも其流行熱に浮かされたる二三の輩ありて鎭西廢娼會の支部抔を設け時々演說會談話會等の催ふしもありしが今日に於ては停滯振はず大に前日と有樣を異にせり流行につれて急激の運動を試みしよりは却て徐々步を進むる方寧ろ行ん奏すべきかと信ぜらる。

妓樓　前述の風俗により本項別して筆を取るを要せず唯繁盛と謂ふの外なし誠に慨歎の至りなりとす。

至急通信

横濱通信員

今廿一日神奈川縣廢娼遊說委員佐々木笑學郞植山壽一郞原澤紀堂の三氏は今縣下縣會議員を始め其他有志者五百名の總代として廢娼建白書携提知事淺田德則氏に捧呈したり時しも知事は手離し難き公務ありとて縣參事官三橋氏代理應接せる佐々木氏は建白の理由及び今縣下の實狀を陳述し是非共此議の採用相成る樣願出られたり因に記す同氏等は尙ほ來月五日開會の通常縣會に請願せんとて原澤氏其文を起草すべく又帝國議會にも請願せんとて佐々木氏其請願文起草に着手せらるゝ由。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の教員孰れも熟達善良あり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

女學生募集廣告

本校ハ英語及英文學ヲ教授スル處ニシテ米國神學博士ペリン氏文學士ケート氏等其任ニ當ル殊ニミセススクウラ孃ハ本校女生徒ノ教育ニ盡力ス入校志願ノ者ハ速ニ申込ムベシ

麴町區飯田町四丁目五番地

私立 自由英文學院

來ル廿五日土曜日 京濱大祈禱會

午前十時ヨリ十二時迄午後二時ヨリ四時迄

主意（午前今年中ニ全國信者、ノ働人ノ働ノ上ニ特別ニ聖靈ノ降臨アランコヲ午後、加拉太六章二節（爾曹互の勞を負へ））

麻布鳥居坂日本メソヂスト教會

●第拾五期會員募集

（學科）唱歌、風琴、理論、教育學、和文、

（程度）文部省幼稚園、小學唱歌集初編、二編、三編

（期限）六ケ月（從明治廿三年十一月一日至明治廿四年四月三十日）

（教師）（教育學）特待講師能勢榮氏●（音樂主任）鳥居忱氏

（注意）素修ある者は試驗の上相當の級に編入す●規則入用の向は二錢郵券送附あるべし

十月

神田今川小路壹丁目一番地

東京唱歌會

女學生第六號は廿一日を以て産れかはりて發兌せり

社園欒

士氣、秋色深し……天知子

女史に代りて三嘆す……暗光子

女子の文學衰へぬ……雲峰子

一夕興變の歌。 夜や靜か。 天女の聲。

五樂と十樂。 秋の七草。 氣、候。

梨壺の五歌仙。 吾が古机。 拾つべく拾つ可らず

說切々

孟母ならずや……清節女史

友よ友よ……佐野以曾子

詞麗々

やまと錦……松本錦子

思ひ亂れて糸の如し……金波女史

雲雀＝われはれ里子……矢見野玉子

似たるかな此仙境……森うら子

ア、不幸の艦よ……中谷早稲子

さやかの月……山田幾子

秋かなし……佐藤德子

歌くさぐさ

答、懇々

しみ拔き諸法。釋迦と孔子の十弟子 愛の贈り物。問三件

客、來々

霞山女史樣へ（小蝶より）。 世界の光明（青菫小史）。

話、愉々

返魂香＝玉椿の段……柵山人

武、凜々……風柳齋

宮本武藏の決鬪、 膽力を吹込む。

無想劍。 薙刀組手（續）。

智、練々

考へもの……四題

報告……數件

女學雜誌社

書舗磊落堂新版廣告文

脇屋乾編　三宅仲校閲

新撰 數學七千題

上中下全三冊正價壹冊ニ付金貳拾錢宛紙數上ノ卷四百ページ中卷四百三十六ページ下ノ卷三百九十ページ郵税四錢宛

上卷目録　記數算命位法○加減乘除○加減合併問題○加減乘合併問題○四則應用問題諸等通法幷合法○諸等加減乘除○同應用問題○約數幷ニ倍數○諸法雜問

中卷目録　分數記數幷ニ命位法○分數化法○分數加減乘除○同加減命併問題○同加減乘合併問題○分數雜問○集合分數問題○分數約數件幷ニ位數小數諸法○同應用問題○循圜小數諸法○諸等分數諸法○單比例○合率比例○連鎖比例

下卷目録　按分比例問題○和較比例○百分算問題○損益算○單利法幷ニ重利法○乘方問題○開平法○開立方問題○出筆乘法問題○級數問題○求積法問應

小學ニ於テ算術ヲ教授スルノ至難ナルハ普ク小學教育ニ従事スル者ノ知ル所ナリ而シテ世間往々此類ノ著書ナキニ非スト雖ヒ甲ハ設題陋少ニシテ實際ノ習練ヲ欠キ乙ハ差ヤ該博ナルモ書冊浩瀚ニシテ初學ノ意力ニ適セス共ニ隔靴ノ嘆ナキ能ハス然ルニ本書ハ編者ガ實地教授ノ任ニ當リ多年ノ經驗ヲ積ミ幾多ノ辛苦ヲ要シテ得タル教案ヲ基礎トシ能ク其適否ヲ察シ取捨所衷偏ニ高等小學ノ程度ニ準シ其參考書トシテ編述シタルモノナレハ設題ノ饒多ニシテ適切ナル解例ノ懇切ニシテ簡明ナル恐クハ本書ノ右ニ出ヅル者ナカルベシ故ニ小學ニ從事スルモノハ勿論苟クモ教育ノ衝ニ當ルモノハ坐右欠ク可カラサル良書ナリ希クハ陸續採用ノ榮ヲ玉ハンヿヲ

筑前香月恕經著

記事祝文 女子文例

正價三拾錢　郵税四錢

文章は思想を發表し、智識を交換するものなる事は、今更言ふ迄もなし、然らは如何なる文章にても此目的を達しなは、則ち可なるへきや、曰く然らず、思想なるものは大に其の性質と關係を、有するものなり、若し男子の長所は剛毅にして女子の得質ハ優美ある所に存すとせハ、其思想も一ハ剛にして一ハ柔ならざる可からす、況して男子は社會の表面に奔走し、女子ハ裏面にあつて盡力す、男ハ活動的の動物にして他ハ沈靜的のものなり、彼が千軍万馬の間に馳突し鮮血を啜るの勇士なれハ、是は帷幕の内にありて靜かに奇計妙略を案するの策士なり其天職斯の如く異り其特質斯の如く相違するを見れハ其文章の自から異なる可きは亦た自然の勢なり、宕落、雋逸、雄大なるハ男子の文の妙處にして温柔、流麗、緻密なるは女子の文の得處なり彼は突兀たる岩角に老梅の嵯峨たるか如く、是は眺め床しき春園に櫻花の繽紛たるか如し、平易優美の文書を書く可き女子にして、強ひて漢文直譯様の六かしきものを作りて得々たるは豈に彼是を轉倒せるものゝあらずや、是れ必竟適切なる參考書に乏しくして、止むを得ず男子と同様の文躰に陥りし弊と云ふ可し、著者深く之に概する所あり流暢婉麗の筆を以て本書を著し博く、好望の女子をして大和文の依る所を知らしめんと欲す、故に篇中撰ふ所ろ四季の記事文より雜部祝文に至る迄作例百貳拾余章專ら實用的の文例を設け傍ら難字には註解を施したれは文學に志ある諸孃は固より論なく苟くも國文の一班を知らんと欲する諸君は實に一本を購ふて幸に前言の妄ならさるを知り玉へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新躰愛國詩文歌 **千代の石ぶみ**

定價拾五錢 郵稅貳錢 郵劵代用諾ス

天下の志士相謀つて一大紀念碑を建設し祖先の偉勳をして永く千古に傳へんと欲す、其の綱常を扶け民風を振ふ豈に壯ならすや本書は元寇紀念碑起工式を祝する爲め、諸方より寄送せる詩歌を編纂せるものにして師範學校中學校を始めとし各高等小學校の軍歌其他有志の諸歌文章に至る迄、網羅遺さす、一讀恰も當時の戰況を目擊するが如き妙篇雄作あり吟誦の間知らす識らす神聖高尙なる愛の國感情を惹き起し、敵愾勃々頑夫も廉に懦夫も奮ひ其正氣を勵まし義氣を養ふ決して鮮少に非す苟くも忠君愛國の志あるものは坐右欠く可からさる良書にして、老少貴賤の別なく朝に夕に之を吟誦しあは英風凜烈神氣奪逸の妙あらん大方の諸君速かに一本を購讀して幸に前言の妄ならさるを知り給はんことを

補註老子道德經 全二冊 正價廿錢 郵稅四錢

古人具原先生刪補 宮崎安貞君著 **農業全書** 全拾冊 正價五拾錢 郵稅拾錢

井上馨伯題詠 老農小關忠平著 **農作改良全書** 全貳冊 正價廿五錢 郵稅四錢

東京方圓社編著 **圍碁初學全書** 全壹冊 正價拾五錢 郵稅貳錢

平野國臣君小傳 全壹冊 正價拾五錢 郵稅貳錢

明治血痕集 上ノ卷壹冊 正價廿錢 郵稅貳錢

該書ハ七年佐賀ノ役九年肥後山口秋月ノ役十年鹿兒島肥後福岡等ノ役ニ斃タル志士ノ傳記詩文ヲ編輯シタル者ナリ

明治女小學しつけぐさ 全貳冊 正價四拾錢 郵稅八錢

明治女大學 相澤英三郎許斐氏春合著 全壹冊 正價廿錢 郵稅貳錢

小學遊戲法 上ノ卷ハ戶外ノ遊戲法ヲ八十七ケ條ヲ纂メ下卷ハ戶內ノ遊戲六拾四ケ條ヲ纂メ實ニ遊戲法大成ノ書ト云ヘシ 上下全貳冊 正價三拾五錢 郵稅四錢

爲替御不便之場所郵劵代用ニテ不苦候ニ付郵便切手御封シ之下御郵送次第卽日御送付可致候也

明治廿三年九月

出版主 福岡縣筑前國博多中島町四拾番地 磊落堂 林斧介

各位閣下

大取次所

東京神田裏神保町	富山書房
同 南傳馬町	目黑支店
同 日本橋區通塩町	高崎脩助
同 横山町三丁目	辻岡文助
同 本石町貳丁目	杉本七百丸
大阪備後町四丁目	吉岡平助
同 安土町四丁目	積善館
西京寺町	福井源次郎

定價

一冊	六錢	郵稅五厘	(但府內無郵稅)
十冊	五拾八錢	郵稅五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY